

# 掲示板

2007年度（4月）第1号 通巻第45号



## 3年間お世話になりました

フィールドレポーター元担当 楠岡 泰

4月でフィールドレポーターの担当をはずれることになりました。レポーターの皆様にはいろいろお世話になりました。スタッフの皆様と東京、萩、太宰府でのボランティアメッセに参加したり、他の団体と交流したり、貴重な体験をさせていただきました。私にとって一番楽しかったのはスタッフの皆様との交流です。スタッフの方が子どものころ体験した滋賀県や琵琶湖の話、自然や山の話など、とても興味深く、ためになる話を聞かせていただきました。

4月から企画調整課で広報担当をしておりますが、博物館におりますので、交流会などに参加させていただけたらと思っております。これからもよろしく願いたします。

## よろしく願いたします。

フィールドレポーター担当 前畑政善

今年、あたらしく担当になりました前畑です。専門は水族繁殖学で、これまでは主に琵琶湖にすむナマズの繁殖生態を研究してきました。自然の生き物について調べれば、調べるほどに私たちヒトという生き物が、如何に自然のことを、また自分たち自身のことを知らないのかを実感する今日このごろです。

私の趣味等、全貌については、本日は、原稿をかく時間がありませんので、おいおいご紹介させていただくことにさせていただきます。(インターネットをご使用の方は、琵琶湖博物館の職員紹介、ならびに私の個人ホームページをご覧くださいませ。)

行き届かないことも多かろうかと存じますが、フィールドレポーターの皆様、なにとぞよろしく願いたします。いろいろ教えてくださいませ。

## \*\*\*\*\* もくじ \*\*\*\*\*

表題	担当	頁	表題	担当	頁
*3年間お世話になりました	楠岡 泰	1	*伊丹昆虫館で	津田國史	10:11
*よろしく願いたします	前畑政義	1	*比良の植物観察会	椋島昭紘	12
*伊丹市昆虫館友の会紹介	平井政一	2:3	*淡墨桜のあれこれ	多胡好武	13
*伊丹昆虫館に行ってきました	家 猫	4	*我家と周辺の鳥たち(1)	加固啓英	14
*大人もわくわく伊丹昆虫館	前田雅子	5	*我家と周辺の鳥たち(2)	加固啓英	15
*伊丹昆虫館交流会に参加	椋島昭紘	6	*伊丹昆虫館交流会に参加	山犬の主人	16
*野生の川・海魚飼って	加固啓英	7:8	*ツバメ調査のお知らせ	スタッフ	17
*二湖物語(その1)	加固啓英	9	*編集後記	スタッフ	18

## 「伊丹市昆虫館友の会」ちょっと紹介

【投稿日 2007.3.9】

高島市 平井 政一

隠れレポーター「いたこん」へ

ホテル調査以降、これまで調査にはそれなりに参加してきたものの、交流会へはほとんど顔を出していない湖西の隠れレポーターです。そんな私が、今回草津よりはるかに遠い伊丹までお供させていただいた。水鳥の観察もできる昆陽池のそばの「いたこん」(伊丹市昆虫館)へは、実は「朽木のいきものふれあいの里友の会」の行事として訪問して以来6年ぶり。参加の理由は、真冬にチョウの乱舞をもう一度見たいということもあるが、最近結成されたという「友の会」の皆さんといろいろ話してみたいという思いからです。

魅力いっぱいの「いたこん」

「いたこん」の魅力は、400円(大人)の観覧料で、何ととっても約1,000匹が乱舞するチョウ温室。日本最大のオオゴマダラや西表島のリュウキュウアサギマダラ、スジグロカバマダラなどが、亜熱帯の花や木々の間を飛び交う姿は、春の菜の花畑と比較にならないくらい壮観な光景です。また、よく見ると、あちこちで自然交配による幼虫が食草を食べている姿も見られ、感動します。その陰には、裏方で日々1匹ずつの幼虫の世話と10数種の新鮮な食草の確保に職員のたいへんなご苦労があると聞きます。

それともう1つ魅力を挙げるならば、2階学習室に置かれている容器では、サナギからチョウへの羽化の様子が間近に観察できること。また、併せてオオゴマダラの金色に輝く不思議なサナギも一緒に堪能できます。

琵琶湖博物館と比べ、ちっちゃな施設なのに、年間約15万人の利用があるというのもうなずける話です。

「いたこん」友の会とは

ちょうど3年前、昆虫館の特別展などのボランティアのフロアスタッフが中心になり、職員の声掛けで、友の会が結成。伊丹市を中心に、大阪市、神戸市、三田市からも虫好きメンバーが集まり、現在280会員。当フィールドレポーターよりも100名も多く、友の会活動としては、ゴミムシトラップやびわ湖バレイでのアサギマダラのマーキングなどの調査活動のほか、妙見山や猪名川への自然ハイキングや昆虫館のうらがわ探検隊をはじめ、甲虫の標本づくりやカブトムシの養殖場づくりという研修活動などその内容は幅広い。最初、昆陽池の生き物調査に参加した家族が、徐々に自然ハイキングなどいろいろな行事への参加を重ねながら、熱心な会員に育つケースが多いとのこと。

運営は、10数名の運営委員と昆虫館職員が協力して実施。今回、お世話いただいた役員には、八木の専門家やちょっとマニアックな虫の愛好家がそろっており、まにまに飛び出す話題は尽きることなく、奥深いものがあります。

「こも巻き調査」を体験

数ある調査活動の中から、この時期ならではのものとして「こも巻き調査」を紹介いただいた。これは毎年10月にエノキやアベマキ、サクラなど何本かの樹木に会員みんなでこもを巻き、真冬の1月末に外して、こもの中に入った虫の種類や数を調査するもの。

こもに入る虫としては、クモ類やサシガメ類、ガのサナギ、ゴミムシの仲間など、多様であり、また樹種により特徴が見られるという。今回は、こもから出てくる小さな虫をピンセットで種類ごとに1匹ずつ集める作業を体験させていただいた。大人も夢中になるほど楽しめ、子供には虫への関心を高めるよい機会となっているようです。

この冬越しの虫の調査は、分類がやや難しいものの、私たちの生き物調査と身近な観察活動という点で通じるものがあるとともに、虫の少ない冬の時期を逆手に取った活動としておもしろく、また誰でも参加できる観察会として意義深いものと思われま

す。  
今後「いたこん」友の会が、昆虫館とよりよい連携を継続させながら、友の会の独自性を一層発揮されることで、ますます活発で、ユニークな存在であり続けていただきたいとお祈り申し上げ、末文ながらお礼に代えたいと思います。

(伊丹市昆虫館で頂きましたチョウ温室の資料を添付しました。掲示板編集担当)



チョウ温室の広さは600m<sup>2</sup>、高さは15mで1年を通して18度以上に保たれています。主に亜熱帯地域を故郷とする約10種、1000匹のチョウたちと、世界各地の熱帯、亜熱帯地域からやって来た約200種、4500株の花や木がみなさんを待っています。

# 伊丹市昆虫館に行ってきました

草津 家猫



いや～楽しかった！2月18日には暖かい日で良い交流会になりました。

伊丹昆虫館は展示がユニーク！！標本が整列していません( TENTウムシがサンバのように渦巻いて踊っている様な飾り方には驚きました)地元で見られる昆虫や、擬態昆虫・玉虫・山繭蛾と生糸などが展示されていて、「蟻地獄」が成長するとウスバカゲロウになるのや、裏表から虹色にきらめくモルフォ蝶が見られます。ただ、ガラスケースに写る蛍光灯が標本を見るのに邪魔になり残念でした、電器具にカバーがあれば光が穏やかになるかもしれません。

虫のフンを集めて布を染めたものにはUVカット効果があり、植物染めだけよりもより効果があるのは初めて知りました。(中国では蛾のフンを茶として飲みます)

温室内をふわふわと飛びまわる蝶は桃源郷のようです。餌は蜂蜜やスポーツドリンクを水で薄めたもので、黄金にキラキラと輝くオオゴマダラのサナギは光を乱反射して鳥から見つかりにくくなっています、何処にいるか判りにくい木の葉蝶などに、自然造物の神秘と芸術性に感嘆させられました。館で彼らのために常に食草植物を用意し、卵を採取して幼虫を飼育して蛹を確保し蝶を年中準備するのも大変な作業です。

私のお勧めは温室を出た所にある< 温室内にいる蝶であなたは何蝶？ >というコーナーがあり、数問の問いに答えると、蝶の特徴から性格診断まで出来て的確に分類されており大変面白いです。

クイズ ムシオネアというイベントにも参加しました。子供にもわかりやすく映像選択式になっていて 蝶の卵の形も様々でゴルフボール状やラグビーボールといった形状を知ること結びつき、アブラムシはお尻から逆子状態で産まれるといった内容が答えとして紹介され、演出が上手いなあ～と思いました。参加賞にバッチをいただきました。

午後からのコモ巻き調査では害虫よりも蜘蛛が多いのは想定外でした。夏には琵琶湖バレーで伊丹市昆虫館・友の会のアサギマダラのマーキング・放蝶があり、琵琶湖博物館のFR も参加できたら楽しい会になり、知見も広がるのではと思っています。

今後も伊丹市昆虫館の方々と交流を深め、昆虫の世界についての多くの事柄を学べる機会を持ちたいと思っています。

## 大人もワクワク 伊丹昆虫館

前田雅子

チョウ温室に入ると初めに花の甘い香り、次に白い大きなチョウがフワフワと飛び交う姿が目に入って、その優雅な舞に感嘆の声があがります。伊丹昆虫館では主に子どもを対象にした展示をしているそうですが、昆虫標本を絵画的に美しく展示したり、ウンチから虫をとらえて提示するなど、大人も引き込まれる“見せる上手さ”がありました。学芸員の方に「展示方法にコンセプトがありますか」と尋ねると、「学芸員個人のノリですね」とはぐらかされてしまいましたが、“展示は昆虫へ誘う手段”と考えていらっしゃるように思いました。

伊丹昆虫館友の会は、昆虫館の講習会に参加したボランティアが継続的な活動を求めて発足したそうです。初め10人ほどだった会員が今では280人。昆虫好きの子どもをふやそうという目的もあって、子どもや家族の会員が多いそうです。今回の交流会には、友の会を運営する人たちが集まってくださいました。さすが昆虫館友の会会員と思っただのは、フィールドレポーターのセミ調査に関連して、伊丹市のセミの様子を尋ねたときです。「伊丹市では最近クマゼミが一番に鳴き始める。アブラゼミは数も少ないが、クマゼミより後に出てくる。ニイニイゼミはほとんど聞かれない。最後まで鳴くのはミンミンゼミ。」と即答されました。身近な事象は意外に見過ごしがちですが、五感を鋭くして自然に接しておられると感じました。

それにしてもクマゼミが一番に鳴き始めるとは驚きです。滋賀県と比べて都市化が早く、程度も進んでいるからでしょうか。伊丹市の緑比率は10%だそうです。初めての県外交流会は、滋賀県の見直し機会になりました。



昆虫館の標本展示

昆虫の体色と配列により  
標本箱に絵画の美しさが！

山崎千晶さん撮影

## 【表題： 伊丹市昆虫館との交流会（2月18日）に参加して】

F R S 椋島昭紘

伊丹市の昆陽池公園内にある伊丹昆虫館を訪問しました。入場するとビッグビー（蜂の200倍の模型）が迎えてくれます。友の会の方が準備していただいた、羽化したばかりの蝶をチョウ温室で放す体験をさせていただきました。オオゴマダラを指の先に捕まえさせて、緊張して持ち上げるとふんわりと飛び立ちました。貴重な体験でした。



オオゴマダラ

昆虫館の中を見学して、メイン展示のチョウ温室がやはり印象に残っています。亜熱帯の温室で、熱帯や亜熱帯地域からやってきた植物がパンフレットによると200種あるそうですが、色鮮やかな花、大振り葉っぱが目立ちます。その中をチョウが顔、頭の上を乱舞していきます。

企画展示「昆虫館スタッフが見た沖縄」では天然記念物のイリオモテヤマネコ、ヤンバルクイナの保護の様子が紹介されています。これら貴重種が保護されていても、数が減少している。西表島では道路が整備され便利になった反面、イリオモテヤマネコが交通事故に遭遇して減っていると紹介しています。考えさせられました。

当日のイベント、昆虫クイズに全員参加しました。来館者の親子連れの方々と一緒に問題に取り組みましたが、なかなか難問でした。正解の多い方に昆虫のカンバッジをプレゼントしていました。館内を見学した後で参加すると正答できる問題で、子供も大人も一緒になって楽しめる良い企画だと思いました。



昆虫クイズ

屋外で友の会の方々の行事「菰巻きによる虫の観察」の体験です。菰を1m位の位置に巻いて、大寒の頃に菰を解いて、捉えた虫の標本を作り観察するそうです。今回の交流会のために残していただいた菰を解いて虫の観察、捕まえた虫をピンセットで集める体験をさせていただきました。とても楽しく、興味深い観察会でした。

会議室でお互いの活動報告をしました。友の会約30名位ですが、昆虫採取、カブトムシの飼育、比良山での観察会、菰巻き観察、など活発な行事報告がされました。フィールドレポートからも調査報告をし、活発な情報交換の場になりました。

懇親会では昆虫館の館長はじめ学芸員の方々、友の会の方々と「ご用達のお店」を貸切で、ビールを飲みながら友の会の活発な活動の裏話を聞きながら、チームワークの良さを感じました。

伊丹市昆虫館の館長さん、学芸員の皆さん、友の会の皆さん、お忙しい中、とても細やかなご配慮ありがとうございました。次回の再会を楽しみにしております。



ヤンバルクイナ（剥製）



菰巻き観察

表 題

## [野生の川魚・海水魚を飼って見ませんか]

投 稿 日 [061123]

名 前 [彦根市 加固啓英]

随分昔に何度か錦鯉や金魚、エンゼルフィッシュ、ネオンテトラ、グッピー、等は飼ったことが有るのですが、近年身近な野生の魚を飼って、この方が手間も掛からず、数段面白く、珍発見も多いことを知りました。今は川魚を飼っていますが、この面白さを皆様にも知って頂きたい、投稿します。

### [川魚]

JR稲枝駅を挟むように流れる愛知川、宇曾川、と同駅の西側の水田の農業用水路から捕ってきた、タモロコ、ハゼ類、コイ、フナ類、タナゴ類、メダカ、ヒメタニシ(ガラスの掃除屋さん)、等25尾程を全部一緒に60cm、の玄関の下駄箱の上の水槽で水深20cmほどにして飼っています。

エア・レシオ、フィルター、ヒーター、等は全く使用せず、河原の礫と水草を添えただけで充分健康に飼えるようです。水草を沢山入れておけばメダカの繁殖は容易です。

水の汚れが目立ったときに、容器に水を汲み上げ、勢いよく注ぎ、底の汚れを巻き上げて、全量の1/3程を汲み捨て、汲み置きの水で(私は冷えた風呂の残り水を使用)元のレベルまで補います。

その間、魚達は礫の影に身を隠しており、全く問題有りません。

餌はDIY店で買ってきた、乾燥ミミズ・乾燥イトミミズ・メダカの餌・川魚の餌、等ですが、1パックの量が10年分も有りそうで、又、魚を飼うのをやめた人が次々に持ってきてくれるので、だんだん増え続けています。

捕り方は、いわば物臭漁方。流れの岸から百円均一ショップの魚・昆虫兼用の目の細かい「玉網」で掬うだけです。

川岸で水面下を目を凝らして見ているとボウフラより小さい、折れたシャープペンシルの芯の様な稚魚の群れがいくつも通り過ぎますが、これは狙い目、大当たりの見つけ物です。

この正体不明の小さな生命体は2~3ヶ月すると若い魚となって素性が分かる楽しみがあります。

これとは別の、アルミ箔の碎片のような正体も区別も不明の稚魚は、フナ類とタナゴ類に成長しました。

異なった場所から採取した同種の魚も、半日ほど後には一つの群れに合併吸収されます。つまり、1つの群れでも血族集団とは言い切れないのです。

一つ分からないのは、私は毎回、餌を前面のガラスから離れた奥の壁際に撒くのですが、人が近づくと魚達はなぜか前面のガラスに押し寄せるのです。

### [海水魚]

若狭湾の埠頭で釣れた外道の雑魚達で、普通は捨てるかリリースする分を持ち帰ったもの

です。

容器に海水を入れ、更にその中に釣れた、生きた魚と海水を入れたポリ袋を入れると車の揺れに耐えて、持ち帰れる事が多い様です。

ペットショップで売っている「人工海水の元」が必要ですが、水質を安定させるにはサンゴ砂(小粒なサンゴの碎片)を30%ほど混ぜた、よく水洗した川砂を水槽の底に敷くことをお奨めします。

もし最小目盛り0.1gの秤と、試薬の手入れ先があれば、主成分の調味料の食塩と少量の試薬の無機塩類で非常に安価に人工海水が作れる筈です。

エア・レシオとフィルターは必要です。

潮溜まりでも生き抜く連中ですから温度管理は不要のようです。

餌は海釣りの餌の残りを生餌か冷凍にした物です。

以前に海水魚を飼うのを止めて、湿った砂が残ったまま数年間放置した水槽の底にゴカイが生き残っていたのに驚いたことがあります。

断然面白いのがクサフグです。

驚くと一瞬にして砂に潜ってしまい、その腹以外の皮膚の色と白い斑点はサンゴ砂混じりの砂とそっくりで、よく探すと緑色の目玉だけが砂の中に光っているのです。

この死骸は、猫などが食べる恐れから、充分深く掘った穴に埋めなければなりません。

色や模様の面白いハゼ類の魚が何種類か釣れます。

大きな背鰭を広げると意表をついたデザインの斑点などが有ったりします。

石の下等に入ると重力方向でなく、体の触れる壁状の物に腹が接する姿勢をとるのもハゼの仲間の習性の面白さです。

10cm程のクロダイは興奮の程度や個体間の順位で縞模様が刻々変わり、個体識別は出来ませんでした。これは川魚のタモロコ等、多くの魚でも同じです。

クロダイの子供達は際限なく突付き合い、結果は「そして誰もいなくなった」状態でした。

生きて持ち帰れば飼って見たい海水魚にヒイラギがあります。

多分乾電池で動くエア・ポンプがあれば持ち帰ることも出来そうに思われます。

しかしヌルヌルな液にまみれて、あまり手に取りたくは無いです。

次々に釣れる魚で、口から長さが4cmほどありそうなポリエステルの蛇腹風の唇が伸び、多分底の泥の中から吸い込むように採餌するのだらうと思います。

又、発光バクテリアの寄生による発光器官があり、音を出す魚としても知られています。

地方によって「食べられない外道」であったり「旨い魚」であったりと、評価はまちまちの様です。

平凡社・世界大百科事典によると、地方名がギチ、ゲドウ、ギラ、エノハ、ギウギウ、グイグイ、ニイラギ、ネコクワズ、ネコナカセ、ネコゴロシ、ニロギ、シイノフタ、と盛り沢山です。



## 表 題

## [ 二 湖 物 語 ( そ の 1 ) ]

投稿日 [061123]

名 前 [彦根市 加 固 啓 英]

私は琵琶湖・淀川水系から遠く離れ、ほとんど全ての点で正反対の霞ヶ浦・利根川水系の土浦市の出身です。霞ヶ浦の最も太平洋から遠い、河川の流入側で「真水」としか認識のない土浦の桜川河口が高校の生物部の調査フィールドの一つでもありました。

1971年に滋賀県に転入、一年間を八日市市で、以後はJR稲枝駅の西側に居をかまえております。

この二つを比較すると、土地ごとに常識と思っていた事に別の視点からの見方が出来そうです。

小学校低学年までしか水辺で遊べるような行き来はしていないのですが、父の実家が漁業の網元で、多分北海道のニシン漁のような渡りの漁師を雇う企業形態だったと思います。

以下は1945年から1958年ごろまでの記憶で思い違いも多々あると思いますがお許し下さい。

別棟の漁師の溜まり場に子供の行き来は禁じられていましたから、今思うと日銭の荒金を稼ぐ、博打などをするような漁師さんだったのかも知れません。

砂浜が船溜まりと、魚の煮干の乾燥場所、広い土間が加工作業所でした。

「機械船」と呼ばれる電気系を持たない、超簡単なジーゼルエンジンを動力とする船が数隻と、その数倍の帆走する穂引網漁舟で、資源保護の目的で沖まで曳航して、漁は帆走する巨大な帆の小舟でやっていました。有明海などの打たせ舟(?といったか)に酷似した舟でした。

風の便り、地上波TVの便りで、現在は観光目的以外には航行していないらしいです。

魚種は琵琶湖＝固有種とは全く異なる海に縁の有る、ワカサギ、シラウヲ、コイ、フナ、太平洋から天然遡上するウナギ、ボラ、ハゼ類(一般に「ゴリ」といわれているようだが、霞ヶ浦周辺では「ゴロ」)甲殻類のイサザアミ、エビ(種は不明)等ですが、工業用水目的で太平洋側の出口に水門を作ったこと、及び養豚が盛んになったこと、更にはご多分に漏れず、外来魚被害でアオコの湖と化し、漁業は壊滅状態らしいです。

尚、私の知る限り1958年以前にはライギョ(カムルチーかライヒか不明)以外のソウギョ、ハクレン、コクレン、アオウオ、等の大陸の大河由来の外来魚の話は聞いたことが無いように思います。

思い出話が長くなりすぎますので、続きは(2)で……

ツダナナフシという名の昆虫がいた。

石垣島・西表島に生息しているとのこと。背中 of 辺りが褐色で、細身のグリーンの棒に長い手足？青い巨大なアメンボウと言った様な昆虫だった。

体色は環境に合わせるようで、好物のアダンの葉色に合わせれば鮮やかなグリーンになり、隠蔽的擬態で知られているが、天敵の眼から逃れる自衛手段としての擬態を心得ているとは偉い奴だ。脚が転節と腿部の境目から比較的簡単にとれてしまうことで敵から逃れるし、その脚は幼虫のときには少しずつ伸び再生するそう。直翅系昆虫でバッタ・コオロギ・ゴキブリも同じ仲間ということだった。外国では「歩く棒」「木の枝虫」と呼ばれていて、ヨーロッパでは人気 1 の昆虫で、日本のカブトムシなみとか。



卵を食植物の葉の基部と幹の間に産み付けるが、孵化しても蛹の時期がない「不完全変態」であり、幼虫も成虫もほとんど姿は変わらず、全身にロウを塗ったような光沢があり、雄なしで繁殖する「単為生殖」の昆虫である。

ツダ何某が89年に西表島で発見して知られるようになった新しい種である。同じツダの仲間にはこんな立派な方も居られるのだ。伊丹昆虫館の奥山さんとは、あちこちの博物館ボランティアメッセで顔なじみだったので、奥山さん曰く「この虫を今日ぜひ津田さんに紹介したかったですよ」と。

ナナフシは文字どおり体節がある昆虫だが、なんで七つも節が必要なのかは聞き漏らした。後で調べたらナナツとは多いという意味で、節はナナツではなくもっと多いのだそう。このヤエヤマツダナナフシは、本土のナナフシなどそばにも寄れない大きい奴だった。彼を好物にしているのは何処のどいつだ？卵は耐海水性であることから海流に乗って分布を広げたのかもと考えられている。

西表で採集した2匹の成虫・体長約11cm

岡田正哉氏 HP「ヤエヤマナナフシ飼育日記」より

蝶の幼虫の糞を集め、それを染料として染物をした展示があり、その根気の良さに驚いた。後でこの染物をした女性と懇親会の席で近くになり、大変な作業を一人でした

こと、他種の糞が混じらないよう、それはしっかり管理したなどと聞かされ、まじまじと彼女の顔を見つめてしまった。クソの役にも立たない...などと言ってる人間こそクソ以下だと悟った。

動物の糞を燃料として重宝している国の人々が居るし、肥料としての利用価値の高いことは知られているが、優雅に舞う蝶の幼い時の糞が、はんなりした染物の原料として活用できること、食草の違いで色も変わることを教えられた。

伊丹昆虫館友の会の方との懇親会はこれまでになく楽しかった。伊丹の方々が心をこめて設定していただいた席に30名余りが集い、私たちFRSは遠慮なく質問し、語り、憚ることなく突っ込みを入れたりして、美味しい酒と肴にくつろぎ、互いに打ち解けたひと時を過ごせて印象に残る一日となった。

後日、友の会の会長・井上さんにお礼のメールをした際、比良山で毎年夏にアサギマダラ蝶のマーキング・放蝶をされていると聞いたので、比良山は地元でもあり、いい機会でもあるので、私達FRも参加できたら...と伝えたところ、今年は8月4日の土曜日になりましたとご返事を頂きました。

8月4日はFRの定例会の予定日ですが、比良山で放蝶されたアサギマダラが遠距離飛翔の記録を作ったと聞かされていますので、伊丹昆虫館友の会のこの行事に、なんとか繰り合わせてFRで、遠く2000キロも飛ぶこともあるというアサギマダラ蝶の、マーキング・放蝶に参加できたらなと思っています。



野外で観察説明を聞く



懇親会で

## 【表題：2月11日の比良、「はしかけ・植物観察の会」で】

【投稿日；2007.2.17】

草津市 椋島

時雨が降る中、でもときおり差すやわらかい日差しが心地よい日でした。湖西線の比良駅を降りて、樹下神社から麓の里山の方に、布谷さんに教えてもらいながら植物観察をしました。この場所は11月に琵琶湖博物館のイベント「比良の里山探検」に参加して、一度きたところです。

あぜ道にタネツケバナの小さい白い花を見つけ、歩いた先の田んぼには菜の花が咲いています。同じアブナ科の花、同じ形をしていると教えてもらいます。タネツケバナの花をルーペで見ると、花びらは4枚、メシベは1本、オシベが長い4本と短い2本があり、小さいけれど菜の花と同じ形をしていました。短いオシベ2本は4本から2本に変化したと教えていただきました。

樹下神社の境内で、茶灰色の幹（モチノキ？）を雨のしずくが同じ道を伝って流れています。葉に落ちた雨は幹にできた川？の道筋を流れ地面を濡らし、その道筋に沿ってコケが生えていました。時雨の日ならではの感動です。

森に入ると落葉樹は葉を落とし、林床にはやさしい日差しがさしこんでいました。落ち葉の下はまだ春蘭などの芽ぶきは見られません。林にはアベマキが良く見られますが、幹のコルク質が浅いものも多く、コナラなどと自然交配しているのではないかと教えてもらい、落ちているドングリをみるとなんとなく小ぶりに見えます。

クロモジの冬芽が良く目立ちました。黒っぽい緑色の若い枝を伸ばし、そこにチョコレート色の葉芽1個と花芽3個のペアが芽吹き、日差しを浴びて際立って見えます。近くに1m位の丈で枯葉が落葉していないヤマコウバシがあります、この時期見分けやすい樹だそうです。香りのある樹ですが、枯れ葉を揉んでも枯葉の臭いでした。

森を出ると畑の土手にはホトケノザ、オオイヌノフグリが日差しを受けて咲いていました。畑の梅の花もちらほら咲いています。山には昨晚からの新雪が積もり、初春ですが、暖冬の今年は森にも畑にも雪がありませんでした。

観察会の様子



クロモジの冬芽



## 淡墨桜のあれこれ

多胡 好武

根尾の淡墨サクラ(H19.4.8 撮影)  
彼岸桜の一種「ウバヒガン」



フィールドスコープで花柄チェック  
彼岸桜の特徴、ふくらみが見えます。

守山市川田公園近くの淡墨サクラ



川田の淡墨サクラの花柄、  
膨らみが見えない



記念樹は手に取れないので、同じ根尾の  
淡墨で横にあった木をアップ



野洲川沿いの川田公園に植えられた  
根尾の淡墨サクラ



「ヒガンザクラはウバヒガンとマメザクラの雑種といわれ本州中部から西に多い  
ちなみにシダレザクラは、ウバヒガンの一変種」……牧野 富太郎

根尾の淡墨サクラは接木苗木が一鉢千円で販売されており、多くの人買い求めていた。(高さ 50cm 位)

標 題

## [我が家と周辺の鳥たち(第1報)]

投稿日 [070228]

名 前 [彦根市 加固啓英]

我が家は野中の一軒家では無く滋賀県彦根市の南端、JR 稲枝駅の西側(琵琶湖側)の150戸程の住宅地で隣接して、ほぼ同程度の住宅地があります。

椎間板ヘルニア2箇所と脊柱管狭窄の入院・手術より退院して自宅に帰ると、そこは家人が居住しながらの劇的リフォーム・ビフォー、アフターのアンダー・ウェイで、部屋、廊下、物置、車の中、……至る所が全て物置状態及び工事現場状態。

私には先に完成した、壁2面が天井までの作り付けの本棚と、ロフトベッドと、その下の事務机の間の僅かな空間の部屋と、そこに続く4面ガラスの既製品のサンルームが宛てがわれ、そこに幽閉状態。

体力の回復待ちにサンルームの簡易ベッドに寝転んで庭を見回していると結構楽しく、訪れる野鳥の多いことに改めて感心しています。

2月27日(火)晴

- \* 上空を通過、トビ、カワウ、種不明のワシタカ
- \* 庭を通過、ハシブトガラス、ハシボソガラス
- \* 庭を訪問、キジバト、ヒヨドリ、ムクドリ、カワラヒワ、ジョウビタキ、モズ、ツグミ、メジロ、
- \* ウグイス
- \*\* 入院前までは庭の水槽のメダカを狙ってカワセミが来たのですが、今はメダカが全滅し、カワセミも見られなくなりました。
- \* 庭に営巣、スズメ
- \*\* 以下に、営巣中のスズメにスポットを当てて見ます。  
庭に近所の子供達が「トトロの樹」と呼ぶ、育ち過ぎて昨年二階の手摺りの高さで胴切りにしたハクモクレンの木があります。  
その切り口を取り囲み一斉に枝が伸びだしましたが、切り口の上に直径が20cm、高さが12cm程の小枝で作った巣が見えます。  
そこにお隣の新築の家の屋根瓦の間から二羽のスズメが飛来して、朝の七時頃から夕方十七時半頃まで、この巣を巡回し見守っているのです。  
風花の様に七羽程のメジロが舞い寄ると、このスズメ達は何処からかすかさず駆けつけ、巣の少し上で睨みを利かすのです。無論メジロとは何のトラブルも無くやり過ごすこととなります。どう言う関係かは知りませんが、これにもう一羽のスズメが助っ人に加わり、完全に共同歩調をとることも有ります。  
餌場では何時も蹴散らされ、追い回される強敵のヒヨドリに対してでも昂然と胸を張り、巣の権利を主張します。  
「先住効果」と云うのでしょうか、ここでは一步も譲りません。

## 標 題

## [我が家と周辺の鳥たち(第2報)]

投稿日 [070228]

名 前 [彦根市 加固啓英]

昨夜からの冷たい雨。朝の6時前の未だ薄暗い中で、庭木に吊るした餌の容器にヒヨドリが一羽、黙々と餌をついばみ続けています。

夜通しの氷雨や強風の明けた朝、小さな野鳥が餌容器にやって来るとホッとします。

この小さな命はどの様にして厳しい夜を耐えて来たのでしょうか。

体温の高いエネルギー消費の大きな小鳥が、小さく、つまり体積・体重当たりの放熱表面積が大きく、その上、大きな鳥に比べて保温・断熱層の羽毛の圧倒的に薄い小鳥が厳しい寒さに耐えられる仕組みが知りたいです。

気が付けば良く見かける野鳥でも、ほとんど何も知らないで過ごしているのです。

樹洞や巣箱を利用しない鳥のトヤについて知らないのです。

我が家の庭木には6個程のインスタント茶椀蒸しやプリン用の空容器の餌容器が吊るして有り、ほぼ毎朝カメラの35mmフィルム容器一杯分の「鶏の餌」を供給しています。

「野生動物に餌付けをすることは…」との意見も聞かれますが、人間が河川敷や護岸の法面をコンクリートで覆い、農道さえアスファルトで覆い尽くし、餌となる雑草の種子や昆虫や蜘蛛さえも激減させており、冬と育雛の間だけでもせめてもの罪滅ぼしに少量の給餌を続けているわけです。

ちと言いつつ許して頂ければ、一つの餌容器に数羽が寄って来ても同時に食べられるのは一羽だけで、あぶれた鳥たちは周囲の枝葉の間や地面を巡り、種子・昆虫・蜘蛛、ナメクジ等を採餌しているようで、容器の餌だけに依存している訳では無さそうです。

おまけに庭の害虫対策にもなっています。

「各動物の最高スピード」なるものの表を良く見かけますが、競馬馬やレースドッグに付いてならある程度は納得出来ますが、その他については何処まで本当なのでしょうか。

ヒヨドリやツグミは我が家の庭の、約18mの木の枝葉を縫っての悪条件下で約1秒で飛び過ぎます。これは64.8km/hに相当します。

琵琶湖の湖岸遺路の愛知川の河川敷から見ていると、何時もは自動車はこの橋をおよそ50~70km/hで通過しているようですが、トビは自動車が橋を渡りきると、ほぼ同時間に同距離を直径とする円を描き終えます。

つまり x(50~70)km/hのすごいスピードとなります。

これもチト納得が行かない。どなたか動物のスピードの測定方法や正しい値に詳しい方がおられましたらお教え下さい。

## 表 題

## 【伊丹市昆虫館交流会に参加して】

投稿日 [070301]

名 前 【野洲市 山犬の主人】

今回の交流会の案内を見たとき、すぐ申し込んだ。仕事の休みが日曜と祝日しかなく、日曜でも囲碁大会やイベント登山などの事もあり、今までの交流会には参加できなかった。伊丹市昆虫館の予備知識は全くなかったが、『昆虫』の 2 文字に曳かれたというのが正直なところだ。しかし私は昆虫全般に興味がある訳ではない。種類が多いのや、外国のものは苦手だ。頭が賢くもなく、FR になってから熱心になったようなものだから。

ふだんの生活圏内のものが精一杯である。たとえばセミである。滋賀県内に生息するのは 14 種類とか。そのうち通常周辺にいるのは 6 種類であとは山間部らしい。『市街地が大部分の伊丹市にはどのセミがいるのか。そして昆虫館にはどんな標本が展示されているのか。』が最大の関心事だった。子供のころの修学旅行の様に 2 月 18 日が待ちどうしかった。

伊丹駅改札口で FRS のメンバーと待ち合わせ、タクシーに分乗し伊丹市昆虫館へ。説明会・放蝶体験の後館内とバックヤードの見学、そしてついつい本気になってしまったクイズ大会。昼食後は若干の自由見学、そしてコモはずし調査の体験。そして本題の昆虫館友の会との交流会。友の会の活動のあらましが紹介された中で、比良山のアサギマダラ調査に気が引かれたのは、やはり調査現場が比良山であるからか…。比良山系には多くのピークがある。南から霊仙山、権現山、法華、蓬莱山、打見山、烏谷山、堂満岳、釈迦岳、ヤケ山、嘉嶺ヶ岳、岩阿沙利山、岳山、西尾根には白滝山、御殿山、コヤマノ岳、武奈ヶ岳、釣瓶岳、地藏山、蛇谷ヶ峰、阿弥陀山。いずれも愛犬リキと共に足掛け 8 年あまりかけてその頂上に立った。しかし生物調査はセミの時、山登りのついでにしかしたことがない。昨秋 10 月末に御殿山から武奈ヶ岳、コヤマノ岳と踏破し、八雲ヶ原へ廻ったとき、比良スキー場のリフトは撤去され、湿原の姿はどこにもなく、丸裸の地肌と泥水の池のみが残っていた。草など一本もなかった。この状態から湿原に回復するまでどれほどの年月が必要なことか。撤去工事により生態系は跡形もなく破壊されたと思われる。友の会のアサギマダラの調査地点はどの辺なのだろう。蝶については何も知らないせいか、しっかり聞いていなかった。

つづいて琵琶湖博物館 FR の調査活動を森さんが詳しく発表された。FR の活動は多方面にわたっているので、そのすばらしさを改めて実感した。発表の最後にわたしに発言の機会をくださった。昆虫館なので成り行きでは語が出るかもしれないと思い、チッチゼミの成体と抜け殻、羽化の写真を用意して行ったのがよかった。一言と言われたのに、懇親会を欠席する分、力が入ってしまった。その時今年チッチゼミの観察会を計画していることを発表した。(その内容は既に掲示板に投稿したのでそのページを参照ください。まだ個人的な案であることをご理解願います。) 天気も何とか持ちこたえ、充実した交流会の一日であった。



## ツバメ調査の締め切り日 7月31日のお知らせ

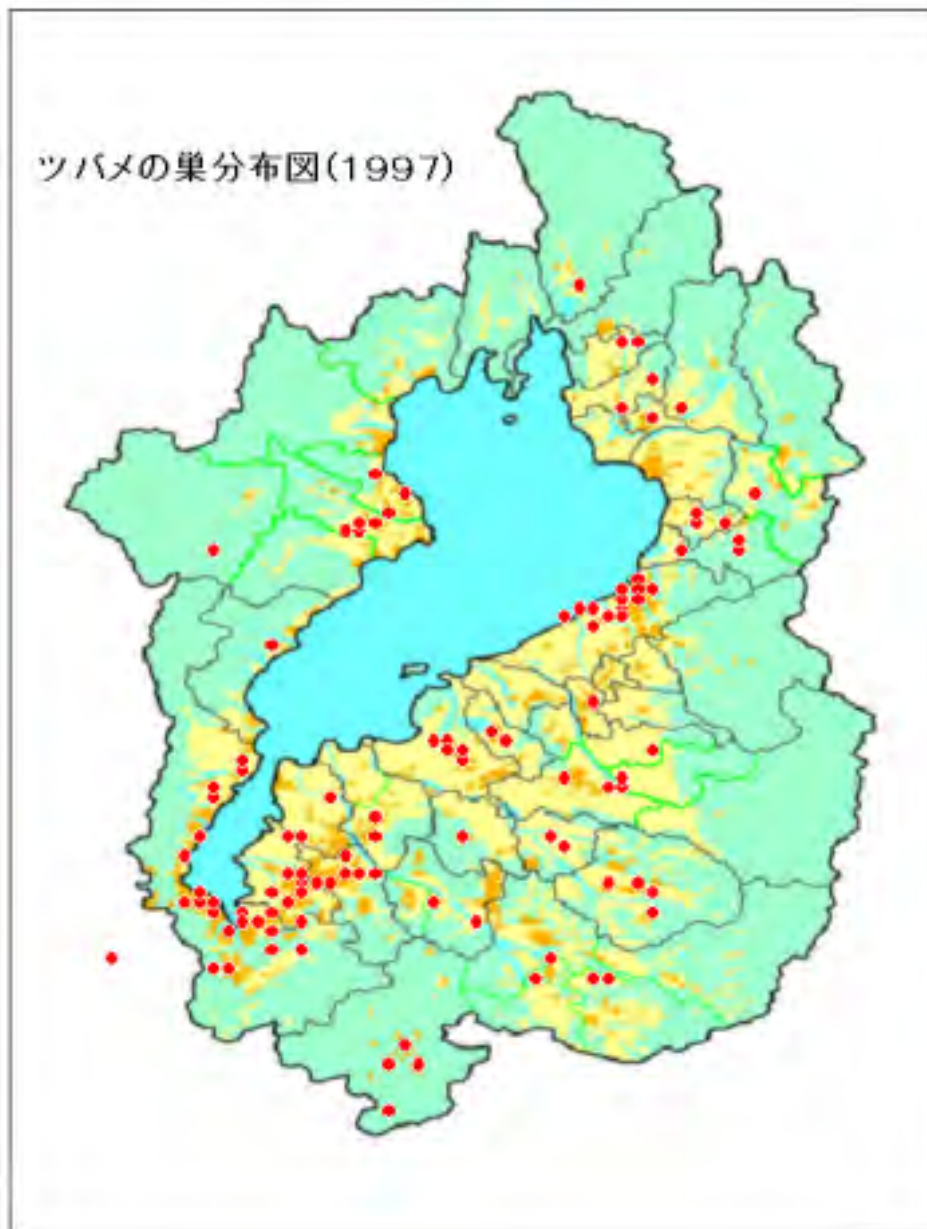
FRS

先だってツバメ調査案内で皆さんに調査をお願いしますとお伝えしておきながら締め切り日の記入をすっかり忘れていました。改めて締め切り日をお知らせします。

### ツバメ調査の締め切りは7月31日とします。

飛んでいる姿だけでは種が確認できなく困っておられる方も居られると思いますが、見かけたという情報も重要ですので、場所・日・時間・などをお知らせください。

参考までに、1997年に調査のまとめから判った県内のツバメの巣分布図です。



## フィールド・レポーター4月・5月・6月予定

次のとおり計画しておりますので皆さんご予定、ご参加お願いいたします。

なお、稀に予定が変更になる場合がありますのでご了承ください。

日 時	内 容	場 所
5月05日(土)13:30~17:00	定例会	博物館交流室
5月19日(土)13:30~17:00	定例会	博物館交流室
5月27日(日)13:30~17:00	交流会('06年度調査報告会)	博物館生活実験工房
6月02日(土)13:30~17:00	定例会	博物館交流室
6月16日(土)13:30~17:00	定例会	博物館交流室

(おことわり；上表の博物館とは琵琶湖博物館のことです。)

### 〈フィールド・レポーター・スタッフから編集を終えて〉

今年の桜は見ごろの期間が長く、外に出かけてみると、公園でシートを敷いて花見をしている方を、昨年よりも多く見かけたように思いました。

フィールドレポーター同士のメールでも、エドヒガン便りの交換をしました。4月4日に高島市の見事な清水の桜(エドヒガン)の満開写真を森さんから、守山市の川田公園のエドヒガンの若木(岐阜の根尾谷から移植)の満開情報、古木の薄墨桜の情報を津田さんから、湖南市石部の宮川沿いに1本エドヒガンと思われる桜の写真を私が、また4月8日には岐阜の根尾谷まで出かけてエドヒガンの満開の見事な写真を多胡さんから送っていただきました。

5月27日(日)に'06年度の調査報告会と交流会を予定しています、多くの皆さんの参加をお待ちしております。自分が調査した内容のまとめですぜひお出かけ下さい。

前回号でお知らせいたしましたが、掲示板とフィールドレポーターだよりが琵琶湖博物館のホームページからフィールドレポーターの活動までたどって行くとカラー版で見ることができます、そちらもぜひ訪ねてみてください。

なお、先日のアンケートで掲示板とフィールドレポーターだよりを電子ファイルで閲覧を希望された方には次回以降の郵送いたしません。

掲示板への原稿は従来どおりEメール(下記アドレス)、郵送とも受け付けております。

(担当 FRS 椋島昭紘)



滋賀県立  
琵琶湖博物館  
交流センター  
〒525-0001 草津市下物1091  
TEL 077-568-4811 (TEL) FAX 077-568-4850  
E-mail: freporter@lbi.m.go.jp

# 掲示板



2007年度 第2号(6月) 通巻第46号

『やさしい』とか『保護』でいいのか？

フィールドレポーター担当 前畑政善

さて、巷には『...にやさしい』とか『...保護』という言葉があふれています。私はこれらの言葉の使われ方がひどく気に入ってません。以前は、私も無意識でこれらの言葉を使っていたのですが、ある時点でこれらの言葉が著しく傲慢なものであることに気づいたのです。それは、くる日もくる日もナマズの観察に明け暮れていた頃。ナマズを観察すればするほどに、今までわかっていると感じていた「自然」のことが、実はほとんど何もわかってはいないということに気づいたのです。この「自然」には、当然私たちヒトという動物も含まれています。・・・自然のことが何もわかっていないヒト。自然とそこにすむ生き物をさんざん痛めつけてきたヒト。その張本人が過去の諸行を忘れたかのように、軽々に環境にやさしくだとか、自然の保護だとか、そんな偉そうなことを言う資格があるのでしょうか。ヒトは体験を通して学ぶイキモノだといわれま。私はまさしく自然(ナマズ)からこのことを教えてもらったのです。さて、おなじような文脈で『かわいそう』もよく耳にする言葉です。ヒトという動物は、なんと欲張りで、やっかいで、そして悲しいイキモノなのでしょう。ヒトは、一旦地上に出現すると、もっとおいしいものを食べたい、もっと便利な生活がしたい、すこしでも長く生き延びたい、もっといろいろなことを知りたい、その欲望には果てがありません。その善し悪しは別にして、これらの欲望が自然を痛めつけながら 今日の『文化』、『文明』を発達させてきたことは疑いようがありません。こうした欲望が、すくなくとも部分的に抑制されない限り、ヒトはこれまでの諸行への報いとして急速に絶滅への道を早めることでは。思うに“かわいそう”なのは身の程知らずの私たちヒト自身なのではないのでしょうか。自らが自然の一部であることを忘れ、頭でっかちになっているのが、現在のヒトのようです。言葉はもっと慎重に選ばれるべきものではないのでしょうか。

皆さん、どう思われます？

\*\*\*\*\* もくじ \*\*\*\*\*

表題	担当	頁	表題	担当	頁
* エッセイ	前畑政善	1	* 病窓から	加国啓英	7:8
* 5月交流会の感想		2:3	* ミノムシ調査	山犬の主人	9:10
* 10周年企画展一言		4	* 夏のセミ調査	山犬の主人	11:15
* ゲンジボタル - 2	山犬の主人	5	* 水族 B.Y 探検中止	お知らせ	16
* チッチゼミ調査	山犬の主人	6	* 予定表・編集後記	FRS	17

## “ 楽しかった交流会！ ”

FR スタッフ

5月27日(日曜日)の交流会にご参加していただいた皆さんからのおよせいただきました感想文を紹介させていただきます。

### 【交流会の内容の簡単なご紹介】

2006年(平成18年)度のフィールドレポーター調査を2件、まとめていただいた『オオヨシキリのさえずり調査』ご担当 多胡好武さん、『ミノムシ調査』ご担当杉野由佳さんからご報告していただきました。そしてそれぞれについて亀田学芸員、榊田学芸員からコメントをいただきました。その後自由に質問や勝手な思い込みなど意見交換しました。



### 【以下はご参加いただいた方々からのご感想】

オオヨシキリの囀り調査、ミノムシの調査をそれぞれまとめていただいた担当の方からご報告を聞かせていただきました。発表の内容もさることながら、報告のあとで自由に意見交換ができ、興味深い説明が聞けて本当に交流会に参加して良かったと思いました。

オオヨシキリは意外にも小規模なヨシ帯にいて、田んぼの生き物も餌にしているのではないかと、オオヨシキリの分布が魚のボテジャコの分布の形にも似ているとか、聞くと興味は広がります。

オオミノガが滋賀県ではまだ多く確認されていることは驚きだ！とか聞くと今回の調査は貴重なデータだったなど、交流会に参加してみると“わくわく”する話が聞けてとても楽しいです。 草津 ヤマボウシ

“琵琶湖が氾濫したら水没するような場所は、オオヨシキリにとって住みやすい環境らしい”とのこと。

今回の交流会で得た知識です。

「レポーターだより」には、そんなこと書いてなかったよね！！

皆さんも、ぜひ気軽に交流会に顔を出して見ませんか？

思いがけない情報が得られ、楽しいですよ。

H.M

## 交流会を振り返って

比良のシャクナゲ

交流会はフィールドレポーターの皆さんが送っていただいた調査票の「まとめ」を  
発表し、博物館の学芸員の意見を聞く、まさにフィールドレポーターと学芸員の交流  
の場です。

今回は昨年春から調査をした「オオヨシキリ囀り調査」の発表で、今まで何度か集  
計結果については発表しましたが、今回は皆さんの「意見」についても出来るだけ多  
く発表したいと思い、送られた調査票を再度見直し皆さんの意見を紹介いたしまし  
た。

また、「鳥類」学芸員の亀田さんからは「オオヨシキリ」の専門家としての話のほか、  
分布地図が明治の琵琶湖大洪水で水没した地域の地図にリンクしているようである。  
など思いがけない話も聞け有意義な交流会となりました。

参加いただいたフィールドレポーターの方が少ない交流会でしたが、皆さんが参加しづ  
らい雰囲気なのか反省しきりです。次回以降皆さんに気軽に参加していただける交流  
会を目指しスタッフ一同頑張ります。是非気軽に顔を出してください。

## 調査報告書に載らない話がおもしろい

ミノムシを愛でない家人

オオヨシキリの調査報告書に「オオヨシキリの生息分布は何かの形と似ている。答  
えは交流会のときにでも」とあったので、交流会を楽しみにしていました。答えは洪  
水時に浸水が予想される湖岸域、なるほど！ オオヨシキリの住み家であるヨシ帯が  
ある場所は、湿地帯や干拓地などの低地で、湿ったところということなのですね。

オオミノガの受難の話題も興味深く聞きました。害虫、益虫という区別をしますが、  
中庸が肝心で、うまく共存できるのが一番。これからはミノムシと仲良くしたいと思  
います。

## お帰りなさい オオヨシキリ

ペンネーム もう少し小声でお願い

4月中旬から田んぼに出ること多かったので、今年はオオヨシキリの声を充分すぎ  
るほど聞きました。

初聴は4月29日、JR篠原駅に近い家棟川の付近。『ギョギョシー』の声は、広  
い田園地域でひときわ目立ちます。翌30日は近江八幡の湖岸や、野洲市の野田でも  
聞きました。この辺りで一斉に鳴き始めたようです。

昨年調査をしたからか、親近感を持って「お帰りなさい」と応えてあげたい、そ  
んな気持ちになりました。また1度だけ、枯れたヨシのてっぺんで鳴く姿を見るこ  
とができました。写真で見たとおりの小さく、精悍な姿でした。次はヨシに造ると  
いう巣を見てみたいと願っています。

【ギャラリー展示】企画展でふりかえる琵琶湖博物館10周年のフィールドレポーター展示にご投稿いただきました一言を掲示板第44号にご紹介しました。しかし、諸般の事情でご紹介できなかった貴重な一言をここでご紹介させていただきます。ご紹介が遅れたこと深くお詫び申し上げます。（FRS）

私が調査に参加したのは、1998年タポポ調査からである。中でも、二度にわたるタポポ調査が一番印象に残る。田んぼの畦に黄色の紙袋を敷きつめたように咲いているタポポが、二度目の調査の時には、すっかりなくなっている。辺りを見まわせば、在来種はわずかで西洋タポポのみ目についた。わずか四年の間に何故？ 気象の変化によって外来種がよく育つようになったのだろうか？

調査の対象は新しい課題が必要なのか、繰り返し調べることが必要と思った。

（中川徳司）

私が琵琶湖博物館のフィールドレポーターに参加したのは1999年の田圃の生き物調査からでした。それまでもカタツムリの調査に参加したことがありますが、同じ種類のカタツムリばかりだったのを覚えています。私は仕事で旧高島郡内を毎日、車で回る傍ら家では60アール程の田圃を耕作していましたので、時間に追われる仕事の中では、気持ちにゆとりが無く、田圃の生き物調査では高島町からマキノ町まで、ついにハウネンエビは見つけられませんでした。タポポ調査では田圃の植え付けが終わった頃にはタポポの開花期は終わっていました。溜め池調査では、やっと調査に取りかかったら溜め池の水が抜かれていたこともありました。退職後はバイト先の菓子屋が四月は繁忙期でマキノ、今津地区はエドヒガンが沢山咲いているのに調べられなかったのは残念でした。どんぐり調査ではクヌギやナラガシワ以外にも沢山どんぐりのなる木があることを知りました。ただ見ているのと観察するのでは物を見る目にずい分違いのあるのを実感しました。

（伊東貴美子）

【ゲンジボタル - 2】

メッシュコード 5236-4072

投稿日 [070113]

名 前【野洲市 山犬の主人】

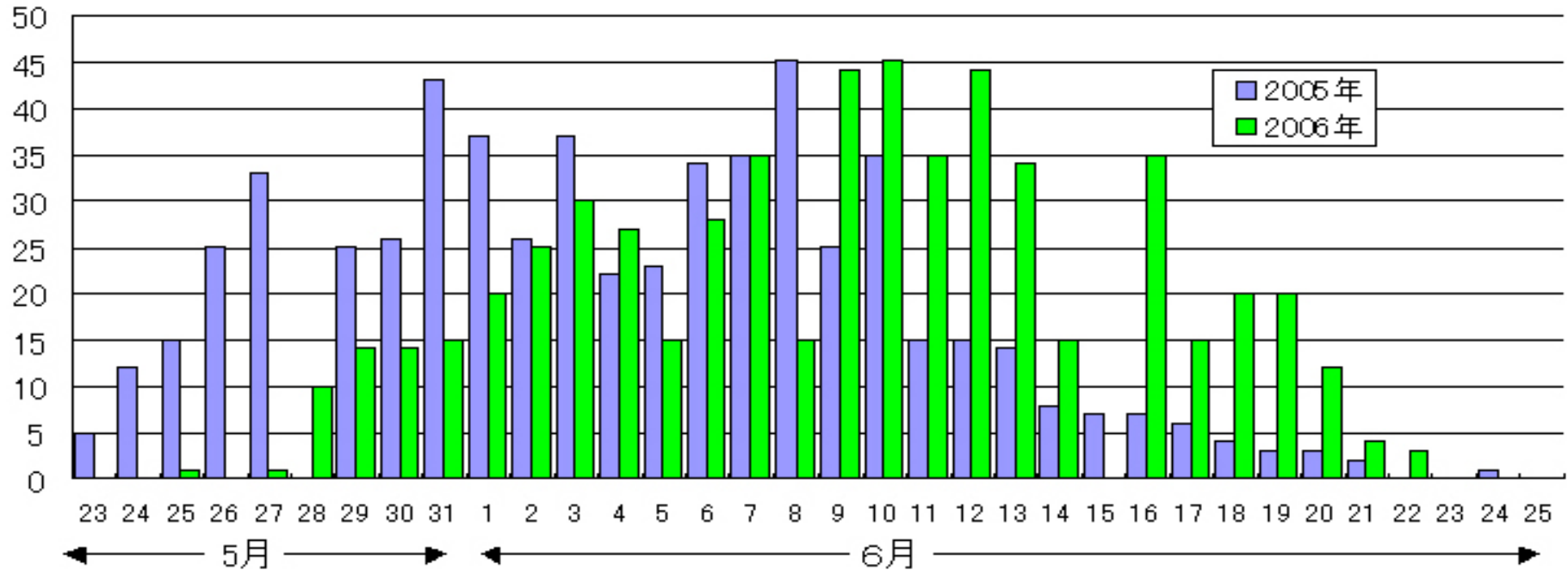
大変遅くなりましたが、前回の続きを報告します。前年より初蛍が2日遅く、見られなくなったのが2日早かったから、合計4日短かったことになる。

6月						
19	20	21	22	23	24	25
20	12	4	3	0	0	0

実はこの場所の東側は空き地だったのだが、春に二階建てのアパートができた。その明かりがかえって邪魔で、観察しにくくなった。蛍も電気の明かりがまぶしすぎて、お互いのお尻(の光)も見えにくい上、人目もはばかることだし、やはり暗くなくては何かとやりにくいことだろう。来季からはどうなることか、繁殖への影響が心配だ。

(単位: 匹)

ゲンジボタル調査



## 表 題

## 【チッチゼミ生息調査計画】

メッシュコード 5236-4072

投稿日【070113】

名 前【野洲市 山犬の主人】

今年にチッチゼミの観察会や県内生息調査をやってみてはどうだろうか。チッチゼミが一般になじみの薄い蝉であることは承知しているし、私もまだ初心者である。まず参考文献を2点紹介する。最寄りの公共図書館で問い合わせさせていただきたい。鳴き声は についているCDで聞くことができる。テープに繰り返しダビングして、覚えると良い。

検索入門 セミ・バッタ 保育社 ISBN4-586-31038-3

自然観察図鑑 主婦の友社 ISBN4-07-935699-4

生息地域... 低山地～山地のアカマツ、スギ、ヒノキなどの針葉樹林に多く、ときには広葉樹林にも生息する。

低山地の明るく乾燥したアカマツ、スギ、ヒノキ林など針葉樹に。

出現期..... 7月下旬～11月上旬(8月下旬～9月に多い)

8～10月(8月下旬～9月上旬に最も多い)

生態..... よく小枝の上側で鳴いていて、姿が見えにくい。

横枝、小枝、葉上で(中略)よく動き回り、近くの小枝に飛び移る。

以上から分かるように、『声はすれども姿は見えず』と言っても過言ではない。私も今回調査してはみたが、鳴き声のする方をいくら見ても、一度も姿を見ることはできなかった。このことから考えて、観察会をしても姿を見られないかも知れないので、同じ日の夕方からの『羽化観察会』も計画したい。これならば前年の私の報告から分かるように、成功の確率が高い。あらまし次のよう考えている。

日 時 8月26日(日)、雨天なら9月2日(日)、重ねて雨天なら9月9日(日)午後2時から。

羽化観察会は同日の午後6時から。

場 所 野洲市三上山。集合場所:裏登山道登山口天保義民碑前駐車場(国道から東へ約200m、国道の御上神社の駐車場に止めて、歩いてよい。)

服 装 ハイキングの支度。帽子、タオル、双眼鏡、防虫対策、水筒、カメラ等。

連絡先 携帯 E-mail [yama-inu@ezweb.ne.jp](mailto:yama-inu@ezweb.ne.jp)



平成18年9月3日彦根市薩摩町で捕獲したチッチゼミ  
(1円玉の直径は20mmである。)

フィールドレポーター・スタッフより

\* チッチゼミの鳴き声の聞かれる Web-site の一例

<http://www.nat-museum.sanda.hyogo.jp/wave/docs/titizemi.html>

<http://homepage2.nifty.com/saisho/zukan/chicchi/index.html>

\* フィールドレポーターとしての観察会については別途、ご案内いたします。



主題 (病室から)

投稿日 (070131)

名前 (島根市 加国啓英)

倉見琵琶湖博物館の近くの琵琶湖の見える病院の7階の病室でこの文を書いています。

病室の西側全面が巨大な窓。遠景は比叡山地。南端に琵琶湖とあすかに琵琶湖遊園。北側に乗来駅、守山駅。周辺のヒル忍草。前北に新幹線が走り、ヒルの間の麦畑の樹を自動車やサテリマン風の人々が行き交うのも妙。

とにかく絶景！！

脊髄管狭窄・椎間板ヘルニアの激痛で転がったのが10月27日。手術予定は明日2月1日。

身の回り品と共に持ち込んだのが「哺乳類の進化」(遠藤秀紀・東出版会)、「生物学辞典」(岩波)、「羅和辞典」(研究社、\*種はローマ(羅馬)となくラテン(羅甸))と「電子辞書」。難解で多分に読み切れなかったものも、この際読破・読破するつもり。

医師、麻酔担当、理学療法士、の先生方への私の質問に真剣に答えて頂き、看護師(女子)さん達には昼夜の別なくお世話頂き、現役リタイア、社会の重荷世代の私が、年金以外にも現存の皆様にお手数を掛けし申しわけなく思っております。ここは病院。極楽、極楽、天国、天国は禁句で、食事も美味しく、脊椎動物の先輩の血の上のマアジの

土性質(中骨)の立派さ！これなら腰痛の心配もなさそう。

時々「麦ご飯」が出るのですが、この麦はるや米類と変らぬ粒径と白さで、あすかに細い茶色い線が一本。

かつての食料難の時代に米の増料材となった。色浅黒くカチリとした体に木目の禪(ふんどし)をキリリと締めた

魚<sup>魚</sup>背(いなせ)で頼れる押麦は今いずこ？

学芸員さん教えて下さい。

~~麦と稗くと理解している種は又かあるのですが全く分らない。~~麦畑の麦はどの様な食品になって食卓に登るのですか？麦畑の麦はオムギ、コムギ、ハダカムギ、ライムギ、エンバク、等の何なのですか？

大体、燕<sup>燕</sup>麦がカラスムギとは何事ですか？

何条大麦茶などとブランド化に使われている芒(のぎ、のげ)の数はどの品種のルーツのきかかりにこそなれ味とは別の物とは違えますか？

その他、食卓には「メヌケ魚周」や「メルルーサ」が上りますが、その都度電子辞書で調べています。

2月末には復帰出来ると思いますので又、定しく。

編集担当からお詫び

原稿の掲示がすっかり遅れまして、本当に申し訳ございませんでした。

加固さんはもうすっかりお元気になられまして、フィールドレポータスタッフの活動に参加していただいております。

## 表題

## 【ミノムシ調査雑感】

投稿日 【070301】

名前 【野洲市 山犬の主人】

「ミノムシの調査なんてカルイ。山登りのついでにチョチョイノチョイだ。」と思っていた。12月3日(日)大津の小関越から如意ヶ岳を経て大文字山 466.0m(5235-4615)に登った。道中キョロキョロとミノムシの姿を探したが全く見当たらない。雑木も豊富なので不思議に思った。下山時に如意ヶ岳を過ぎたところでニトベとおぼしきものをゲットしたものの、車に戻ったときにはコナゴナになっていた。

12月23日(祝)信楽の掘木谷(ほきたに) 537.4m(5236-3004)に登った。県道わきの鉄塔の巡視路を忠実に登る。ここでもミノムシは見当たらない。翌24日(日)同じく信楽の、長野東山 559.7m(5236-2046)に登った。ここでもミノムシは見当たらない。山にミノムシはいないのだろうか。

年が明けてからは、まず神社を調査した。1月3日、小篠原の稻荷神社参道(5236-4072)では見当たらなかった。ここはエドヒガン、セミの調査地点でもある。つづいて妙光寺の御池(5236-4062.4063)の周囲を調べた。この池の北岸に三上神社(国宝の御上神社とは異なる。)があるが、ここには見当たらず、南岸でやっとクロツヤをひとつ見つけた。

1月14日(日)御上神社境内の森(5236-4052)で調査した。ミノムシを探していると、何とセミの抜け殻を見つけた。ヒノキの幹にしっかりしがみついているという感じだ。夏の名残なのか、まさか冬に羽化した訳ではあるまい。それにしても4ヵ月以上も落ちなかったということは、強風が吹かなかったということか。ここでまた浮気の虫が動き出した。『他にもあるのでは?』という好奇心が頭をもたげて来たのだ。『おいおい、今はミノムシの調査だぜ。』ともう一人の自分が止めようとする。結局両方を探すことにした。曇り空が今にも泣き出しそうな気配になり、森の中はしだいに暗くなり見えにくくなった。写真も撮ったがデジカメを使いこなせず、ピンぼけで使い物にならない。

1月21日(日)再度御上神社に。ミノムシはほとんどがクロツヤで灯籠や電柱などについているのがほとんどで、木の枝についているのはほとんど無い。先週見たセミの抜け殻の写真を撮り直すため、探し回るがなかなか見つからず、30分ほどしてやっと見つけた。ツクツクボウシのようだ。アブラゼミ見つけた。

つづいて生和神社(5236-4092)に。ここでもミノムシはなかなか見つからない。やっと見つけて写真を撮るがうまく行かない。ここでもアブラゼミの抜け殻を見つけた。この森は松や広葉樹が多く、斜めや横に伸びた幹・枝の下側を注意深く探すとすぐ見つかった。何と1ヶ所に3個も。探すコツはここにあるようだ。

2月12日(祝)信楽・雲井の日雲神社から竜王山に登り頂上から谷に降り反対側に登り返し尾根を辿り、堂山 521.7m(5236-2087)に登った。しかしここでもミノムシは見当たらなかった。

2月25日(日)信楽・小川の城山(5236-2003) 470.4m に登る。ここは頂上付近まで広い舗装道路でミノムシを探す木もない。登頂写真を撮り早々に下山し、次の長野西山(5236-2062) 543.8m へ向かう。今峠からすぐ尾根に取り付き、30分足らずで頂上へ。登山道には、ミノムシは見当たらない。やはり山にはいないのか。この辺が潮時のようだ。



表 題

【夏のセミ調査】

メッシュコード 5236 4072

投稿日 【070113】

名 前【野洲市 山犬の主人】

遅い梅雨明けとその後の猛暑のせいで、山登りに行く気も失せたこの夏、オオヨシキリさえずり調査にも二の足を踏み、情けない限りだ。しかしながら、犬の散歩、通勤ルート、そして仕事での野洲・彦根往復は変わらないので、セミの調査をやってみた。FRSの杉野さんが「今年も継続する」と言っていたし…。わざわざ時間を費やす必要がなく新たな結果が期待でき自己満足度も高いというのがその理由なのだ。しかも、山登りの際にも関連調査が可能なのだ。日曜・祝日しか休みがない私にとってはこのような調査しかできないのだ。結果的に去年の二番煎じのようになったが、今年の本命はチツゼミの調査である（注：文中の去年は2005年、今年2006年、来年は2007年です）。

去年のデータは調査票に直接書いたものもあり、その分は控えがないため、比較対照できない（?印）。初鳴きを確認した日付は次の通り（印は鳴き声がしなかった）。

ポイント	ニイニイ		アブラ		ツクツク		ヒグラシ		ミンミン		クマゼミ	
	去年	今年	去年	今年	去年	今年	去年	今年	去年	今年	去年	今年
A 行畑	703	712	?	802	816	811					?	?
B 栄			?	802	817	821					806	
C 生和神社	709	714	721	802	?	?					802	807
D 岡山	705	721	?	?	?	?	729		825	829		
E 白王町	705	719	?	?	816	?	729	821	822	828		
F 大宮神社	?	720	?	?	?	?			824			
G 木和田神社			?	?					830	829		

注)A～C野洲、D、E近江八幡、F、G彦根

ニイニイゼミは他に先駆けて発生するため、確認は容易かつ正確である。ポイントFは、湖周道路走行中に車からは聞こえにくいので、側道へ入る必要があり、毎日ではできなかった。アブラゼミはニイニイゼミが邪魔で初鳴きは大変分りにくいのは去年も書いた通りだ。鳴き納めはあえて調査しないことにした。当初は伝票式調査票を用意するつもりだったが、携帯電話をもったため日記式にメモすることに変更したのが、かえって災いした。記入漏れがあるのだ。やはり原始的な方法が一番良いのだろうか。

上の表から分かるように、ほとんどが去年より遅い。またクマゼミはどのポイントも発生数が去年より大幅に少ない。去年鳴き声を確認したのに同一メッシュ内なので報告しなかったポイントで、今年は鳴き声が全くしないところがあるのだ。

ミンミンゼミもFは去年はわずかだったし、Gは去年走行中にうるさいほどに聞こえたのに、今年は停止してやっと聞こえる程度だった。D、Eは里山なので走行中によく聞こえるが、去年よりは少ない。今年初鳴きを確認できたのは、野洲市の妙光寺山麓(8/28)。山の手前は国道8号線なのに、毎日の犬の散歩コースから約300m離れていても、障害となる建物などが全くないのでよく聞こえる。たまたま今年鳴き声を確認したのは彦根市8号線沿い玉姫殿(7/30)、そして今年新たに調査確認した生息ポイントは、御上神社、長命寺山、曾根沼緑地、安土山と撒山の鞍部にあたる北腰越、青竜山、箕作山、瓶割山である。三上

山の頂上付近では数匹の鳴き声を確認した。ここだけは去年より多い。

毎日の野洲・彦根間の移動ルートでは今年はヒグラシの鳴き声をほとんど聞いていない。D、E では例年にぎやかに聞こえるのだが、E でも2、3日である。長梅雨と9月に入ってからの早い冷え込みの影響なのか。7月30日に奥伊吹の林道ではヒグラシの蝉時雨の中で何回も体当たりを食らった。山のヒグラシは鳴き声も低く、くぐもって聞こえる。

そして最後はチッチゼミについて報告する。昨年末に今年はチッチゼミの生息調査をすることに決め、ポイントとして新たに10カ所をあげた。ノートには菩提寺山、鏡山、岡山、八幡山、長命寺山、瓶割山、荒神山、青竜山、撒山、箕作山と記してある。これらは標高450mまでのいわゆる里山で、三上山に類似した独立峰かそれに近い山塊である。

チッチゼミの生息調査の具体的方法は、鳴き声があるか、成虫はいるか、抜け殻を探すの3段階である。実施時期は8月下旬に三上山で発生を確認してから始めることにした。

数年前勤務先の外壁下の芝生で臨終間際の成虫を拾い上げたのがチッチゼミとの出会だったことは去年述べた。このゼミの1日に移動できる距離はどれくらいなのだろうか。

チッチゼミは低山地～山地に棲むと本にある。とすれば仮に三上山から尾根続きの端の田中山(292.9)までは、例えば世代を数回重ねれば可能かも知れない。しかし田中山は十数年前の山火事で3日間にわたり地面まで焼き尽くされ、木は一本もない禿げ山なのだ。世代はその火事で途切れたと考える。その隣の妙光寺山から直線距離で2.5kmの私の勤務先まで飛び続け(その間に山はないのだから)そして力つきた・などとはとても考えにくい。むしろ150m程しか離れていない生和(いくわ)神社の森に棲んでいたような気がしてならない。この森は蚊も多く、チッチゼミの生息調査は防虫対策を十分に講じなければやりにくい。鳥や他の虫の声にもぎやかだ。この神社から2kmの距離に長澤神社がある。この両方の神社からほぼ等距離の8km北に水荃城で知られる岡山があり、その東3km弱に八幡山があり、その北尾根端とは渡合橋を挟んで500mほどで長命寺山(333)・津田山(424.7)の山塊だ。

8月27日三上山のポイントに登り、抜け殻を16個採集し発生を確認。9月3日再び三上山に、この日は頂上まで登る。山頂付近まで鳴き声があった。ミンミンゼミの鳴き声が去年より多く聞こえる。下山後に御上神社の森を調査、アブラゼミ、ツクツクボウシ、ミンミンゼミの鳴き声を、前から2つは成虫も確認、ニイニイゼミは抜け殻を確認、しかしチッチゼミの鳴き声は聞こえなかった。次いで去年の鳴き声ポイントの旧中主町の長澤神社へ行き、鳴き声を確認したが抜け殻、成虫とも確認できなかった。さらにその次は、去年からチッチゼミの生息を確信していた長命寺山へ。上の駐車場に車を止め、山頂へ向かう。車道を歩く間にミンミンゼミ、チッチゼミ、ツクツクボウシ、ヒグラシ、アブラゼミの鳴き声を確認した。登山道では2カ所で鳴き声を確認するが、抜け殻・成虫の確認はできなかった。山頂付近はチッチゼミの鳴き声はしなかった。下山後さらにその足(車)で昨年鳴き声を聞いた彦根市薩摩町のポイントへ。鳴き声を確認したのち姿を求めたがやはり見えず、抜け殻を探すがこれも見当たらない。諦めて帰りかけたとき、足元の路面に蠢くチッチゼミの成虫を発見、拾い上げた。これにより、声のみで生息ポイントとすることに自信をもつことができた。三上山に次ぐ2カ所目の成虫捕獲である。そして何と言っても湖岸堤と湖周道路が引付いた、海拔80m余りの平地である事の重大さである。ここは長命寺山・津田山山塊の笠鉾山からでも約7kmの距離だから、とてもそこから飛んで来たとは思えない。しかし荒神山の端からだとも1.5kmである。ならば荒神山にチッチゼミが生息していると、考えるのが妥当だろう。だがこの日は、まだ、自、のあるチッチゼミを加固さんに見せたくて、

お宅に急いだ。玄関で見せながら、数分の FR 談義。2日後、彦根からの復路のコースを変え荒神山の麓の曾根沼緑地公園脇を通った。アブラゼミ、ツクツクボウシ、ミンミンゼミの声を確認、翌日念のためエンジンを止め耳をすますと、チッチゼミの鳴き声がするではないか。これで上の荒神山にチッチゼミがいることを確信した。

そして9月10日、まず長澤神社に足元にチッチゼミが転がっていないか、抜け殻はないかとチェックを入れるものの、鳴き声のみである。しかし、ここのチッチゼミはどこから来たのだろうか。ここは旧野洲川北流の土手下にあたり、三上山からは約4kmである。

土手も北流も既がないが、竹生の在所を挟んでわずかの昔からの樹木と竹林が残っている。ここが関係あるのではなからうか。確認はまだしていない。次いで八幡山(271.9)へ向かったが、観光バスやマイカーであふれており、この日はやめて、安土の織山へ。車で上がれる観音正寺林道をゲートまで行くと、ここでチッチゼミの鳴き声を確認。これより上に行く必要はなくなった。左折してすぐの鳥打越ではより強い鳴き声を確認、抜け殻を探すが見当たらなかった。姿は勿論見えない。県道へ出て北上すると北腰越でミンミンゼミの鳴き声を確認。さらに足を延ばし、荒神山へ。南側から林道を上がるとじきにチッチゼミの鳴き声がした。駐車場まで至る所で鳴き声がする。

今年聞いた一番にぎやかな鳴き声だ。しかし崖側なので姿を見るのは無理だ。山頂を来年にでも調査しよう。今回は下の曾根沼緑地公園で抜け殻を探すことにして下へ降りた。そのとたん雨が降り出したのでこれも諦めて、加固さんの家に行くことにした。二人で口角泡を飛ばしてFR談義。ここまで述べた内容の話をして論議を深めた。このときに茨城県筑波山麓付近のクマゼミ騒動の話聞いた。だれかが遠方で捕獲した20匹ほどを筑波山の辺りに放しそれが増えたとか…。しかしチッチゼミの場合、これは考えにくいと思う。私は元気なチッチゼミを見たことも捕獲したこともない。鳴いている姿を見たこともない。この経験から・新しい生息地を作る目的でチッチゼミを多く捕獲して他の離れた地点に放すことなど、金と暇が無ければとうてい無理、いや有っても無理かも知れない。この談義の中で、来年FRの力を借りて、チッチゼミの生、自、調査を実施してはどうかなどと話が膨らんだ。

9月17日、観光客の少ないうちにと、9時に家を出て八幡山へ。登山道へ入ると間もなくチッチゼミの鳴き声が聞こえるではないか。ツクツクボウシの鳴き声に邪魔はされているがしっかり聞こえる。時折ミンミンゼミの声も聞こえる。鳴き声は山頂まで聞こえた。北の丸趾ではミンミンゼミの成虫も確認。素手での捕獲を試みるが失敗。チッチゼミも数匹はいるようだ。ここではっきり分かったことだが、ミンミンゼミなど他のセミは複数鳴いていると合唱や輪唱のように鳴くので別々にいるのがよく分かる。しかしチッチゼミの鳴き声は複数いるのが分からないほど、シンクロして聞こえる。まるで一匹であるかのようだ。実に不思議だ。登山道ではツクツクボウシ、ニイニイゼミの抜け殻をゲット。ツクツクボウシの成虫もゲット。そして岡山へ。この山には中腹に水道の貯水槽がある。そこまではコンクリートブロックを使用した階段になってはいるが、ブロックは傾き、草が行く手を阻むように茂っている。ミンミンゼミ、ツクツクボウシの音がにぎやかだ。貯水槽を左へ進み尾根に取り付く。貯水槽の上方を通るとき、チッチゼミの声を確認。2、3回のアップダウンの後三角点に着く。ここはミンミンゼミの声が強く、チッチゼミの声は聞こえない。おなじ道を引き返す。チッチゼミの声は前述のポイントのみであった。翌18日、まず青竜山へ、胡宮神社の登山口からすぐツクツクボウシ、ミンミンゼミの蝉時雨。少し登るとチッチゼミの音が聞こえる。声のするのはヒノキの方からが多い。頂上の三角点周辺は伐採されていて、眺望はすばらしい。下山時に抜け殻を探すが見つからない。つづいて箕作山へ。

この山は国道8号線を挟んで撒山の東隣りだからいるはずだ。太郎坊宮から上がる予定で八日市へ向かう。途中市内の中心部の神社でミンミンゼミの大合唱を聞く。太郎坊宮の参道を上るとすぐに成願寺がある。ここでチッチゼミの声を確認したので山には登らず、抜け殻を探すが、見つからない。ツクツクボウシの抜け殻と の成虫、ニイニイゼミの抜け殻をゲット、ミンミンゼミの の姿も確認。さらに続いて、瓶割山へ。手前の西山の裾でミンミンゼミの声を確認。不二滝の入り口に車を止め、まず滝へ。ここでもうチッチゼミの声を確認。抜け殻を探すが見つからない。キャンプ場広場から隣の日吉神社側へ。瓶割山の登山道への取り付きでまた声を確認。抜け殻を探すが見つからない。山には登らず戻ること。坂を下りながらツクツクボウシの抜け殻をゲット。ついでに雪野山へ向かう。駐車場のすぐ近くに大きな杉の木があり、枝の上の方からチッチゼミの音がするではないか。声のする方を見たが姿は見えない。抜け殻を探すがニイニイゼミとツクツクボウシしか見つからない。3時半になったので、この日はこの辺でやめることにした。雪野山はもう一度調べようと思う。実は調べているうちにミンミンゼミとチッチゼミの关系到気が付いた。チッチゼミのいる所またはその近くにはミンミンゼミがいるのだ。チッチゼミがいるかどうかを調べるには、ミンミンゼミの音がするところを調べたらどうだろう。ミンミンゼミの音がしないところにはどうもいそうにない。しかし、ミンミンゼミの出現期とチッチゼミの出現期が違うから、先にミンミンゼミの生、自、を調べておく必要がある。

22日(金)は仕事から帰るとすぐに三上山に調査に行った。23日からは松茸山になるからだ。しかしここはシーズンは終了したようだ。抜け殻は樹木には全く見当たらず、根元を嘗めるように這いずって探し、やっと4個を見つけただけだった。

23日(祝)は菩提寺山へ。今日は犬のリキもいっしょだ。9時過ぎに出発。9時半にみどりの村西口の登山口から登る。舗装道路は両側からの草で隠れ気味である。所々に茨が有り刺が痛い。調査もこの連休が今年最後のチャンスである。秋の虫の声が多く聞こえる。

少し上がった所の松の木でチッチゼミらしき声が聞こえたが、鳴き方が少し違っている。チッチッチ...と数秒鳴いて止まる(通常はずっと鳴き続け、鳴き止むのが全く分からないのだ)。この声では判断が難しい。中間地点ぐらいからヒノキが現れツクツクボウシの声にかき消されるかのような弱い声が聞こえる。チッチゼミのようだが、声が複数聞こえシンクロしていないので、断定し難い。展望岩前後の桧林を過ぎると、広葉樹が主となり、セミの声はしなくなる。彼岸の中日ともなれば、無理もないか。頂上で登頂写真を撮り、小休止の後、下山開始。桧林では先程よりもセミの声はにぎやかになっている。気温が上がって来たせいだ。このツクツクボウシは「グリグリオーズ」と聞こえる。まるでキリギリスとウマオイの声を合わせたような...。そして登るとき妙な声を聞いた松の木に近づくと、何と、元気なチッチゼミの音が聞こえるではないか。目の前で鳴いているのだが、いくら目を凝らしても姿が見えない。一步踏み出した所で危うく滑落しそうになった。朝の妙な鳴き声の主は寝ぼけたチッチゼミだったのだろうか。来年の課題になりそうだ。この日声がしなかったミンミンゼミもいるはずだ。

帰宅してシャワーを浴び、昼食を済ませ今度は鏡山へ。鏡口から入り林道を進むとツクツクボウシの声。松林から桧林になると、チッチゼミの音がする。わたしが移動するたびに声のする方向が変わるが、セミが移動した気配はない。完全にシンクロしているので、どこに立っても一匹にしか聞こえない。抜け殻を探したが見つからなかった。初期の目的は達成したので、本日の予定は終了。あと頂上までは来年に先送りすることに。ここにもミンミンゼミがいるはずだ。時期が終わっただけだと思う。



24日(日)、先週駐車場の近くだけで終わった雪野山へ。「古の小径」ルートで山頂へ向かう。すぐにツクツクボウシの音がする。中間地点辺りで、チッチゼミらしき音がするが、朝の9時半では秋の虫の声のようでもある。前日の菩提寺山の様子と似ている。尾根に出て鉄塔を過ぎるとアカマツ林となり、ツクツクボウシの声も大きい。山頂に近づくと桧林になり、チッチゼミの音がよく聞こえる。声はやはりシンクロしている。頂上で抜け殻を探すが、やはり全く見つからない。勿論成虫の姿も全く見えない。これで今年のチッチゼミの調査は終わるが、チッチゼミ生、自、の必要条件是『針葉樹の林のある山で、ミンミンゼミも生息する。』と言えらると思う。ゆえに、これを「ミン・チセットの仮説」と呼ぼう。今年の調査ポイントすべてでミンミンゼミの鳴き声が確認され、チッチゼミの抜け殻が見つければ「ミン・チセットの法則」と言うことが可能となるかも(?)

チッチゼミ調査結果一覧

参考 参考

ポイント		日付	山麓	山腹	山頂	ミンミン	ツクツク
三上山		8/27	×				
御上神社	平地	8/27	×	-	-		
長澤神社	平地	8/27.9/03		-	-	×	
長命寺山		9/03			×		
薩摩町 メタセコイア	平地	9/03		-	-	×	×
曾根沼緑地	平地	9/08		-	-		
荒神山		9/10					
撒山		9/10	×				
八幡山		9/17	×				
岡山		9/17	×		×		
青竜山		9/18			×		
箕作山		9/18					
瓶割山		9/18					
菩提寺山		9/23	×		×	×	
鏡山		9/23				×	
雪野山		9/18.9/24				×	

: 声あり  
 × : 声なし  
 : 成虫捕獲  
 : 成虫視認  
 : 抜け殻あり  
 - : 該当なし  
 空欄 :  
 調査せず

## 水族バックヤード探検の中止について（お知らせ）

本年度、当館にて計画しておりました水族バックヤード探検は、国内においてカエルツボカビ症 の発生が確認されたため、すべて取り止めにさせていただきます。

ご参加を予定されておりました皆様には、ご迷惑をおかけし、申し訳ありませんが、館内にて飼育・展示しております両生類（オオサンショウウオ、イモリ、カエル類など）への感染防止のためですので、ご理解のほどよろしくお願いいたします。

カエルツボカビ症：真菌類（カビ類）が引き起こす病気で、両生類にとって過去最悪の感染症で、世界で起きている両生類の絶滅の主たる原因とされています。カエルによっては、発症すると 90%を超える致死率を示します。日本国内では 2006 年 12 月にはじめて確認され、野外、飼育下を問わずその蔓延が危惧されている病気です。

## フィールド・レポーター7月・8月・9月予定

次のとおり計画しておりますので皆さんご予約、ご参加お願いいたします。

なお、稀に予定が変更になる場合がありますのでご了承ください。

日 時	内 容	場 所
7月07日(土)13:30~17:00	定例会	博物館交流室
7月21日(土)13:30~17:00	定例会	博物館交流室
8月04日(土) (別途案内)	伊丹市昆虫館交流会 (アサギマダラ・マーキング)	比良山
8月18日(土)13:30~17:00	定例会	博物館交流室
8月26日(日) (別途案内)	伊丹市昆虫館交流会 (チツゼミ観察会)	三上山
9月01日(土)10:00~17:00	定例会(掲示板発行)	博物館交流室
9月15日(日)13:30~17:00	定例会	博物館交流室

(おことわり；上表の博物館とは琵琶湖博物館のことで)

### (フィールド・レポーター・スタッフから編集を終えて)

びわ湖の水位が過去に経験の少ない位に下がって生態系への影響が心配されています。でも、今週になってやっと梅雨入りして恵みの雨をもたらしてくれました。南郷の瀬田川洗堰も今年は春になっても全閉に近い状態が続いていましたが、この雨で水門が少し開放され水が気持ちよく流れています。そして川沿いには、緑の森にウノハナの可憐な白い花が咲き、黄褐色のシイの雄花がもくもくと目立っています。

先の伊丹市昆虫館との交流会時に話がまとまりました2件の行事、8月4日(土)比良山での“アサギマダラ”のマーキングと、FRの寺田さんが企画されました8月26日(日)“チツゼミの観察会”を別途ご案内しております。ご関心のある方は申し込みをお願い致します。

なお、先日のアンケートで掲示板とフィールドレポーターだよりを電子ファイルで閲覧を希望された方には今回から郵送いたしませんでした。

掲示板への原稿は従来どおりEメール(下記アドレス)、郵送とも受け付けております。

(担当 FRS 椋島昭紘)



# 掲示板



2007年度 第3号(9月) 通巻第47号

## “安心”まで売って欲しくない！

フィールドレポーター担当 前畑政善

今年の冬2月ころ、蒲生町で“冬季湛水不耕起水田”をやっている農家の方とお話をする機会を得た。“冬季湛水不耕起水田”とは、その名からも想像できるように、冬季に水を張り、稲刈り後も一切耕さない新農法である。その方がおっしゃるには、耕さないだけでなく、化学肥料もまったく使わずに、糞やもみ殻などその水田からとれたものだけを肥料として還元し、農薬もまったく使わないのだという。宮城県などでガン類の越冬場所を確保するための“冬みず田んぼ”というのをやっているのを知ってはいたが、身近にもこの農法を実践しておられる方がいることを知ってやや驚いた。話を伺ううちに、その方から思いがけない言葉が飛び出した。「私らは安全を売りこそすれ、安心までは売っていない」というのだ。

昨今、鶏肉や豚肉が牛肉に化けたり、食品類の残留農薬や医薬品、その他もろもろの商品に含まれる化学物質などが大いにマスコミにぎわせている。「私たちは、安全・安心をお届けします」などと、今やテレビなどで流行言葉になっている「安全」と「安心」。確かに、この方がおっしゃるように、食べ物や医薬品など、生産者は「安全」な品物をおこなうことが義務であり、一方、「安心」というのは、あくまでも消費者個人が自分の肌で感じとるものであろう。生産者は「安心」まで売ることなどできはしないのだ。そう、生産者が「安心」まで売るといふのは、明らかに越権行為なのだ。

私は、前回もこの欄で自然をさんざん痛めつけてきた張本人たる私たちが、過去の諸行を忘れたかのように、「・・・にやさしい」とか「自然保護」などの言葉を軽々に使うべきではないと疑問を投げかけました。すなわち、流行言葉には、時々ウソや本来の意味とは違った内容が混じっています。したがって、それらを鵜呑みにせず、自分で咀嚼する習慣をつけなくては、と今更ながらに自戒する今日この頃です。

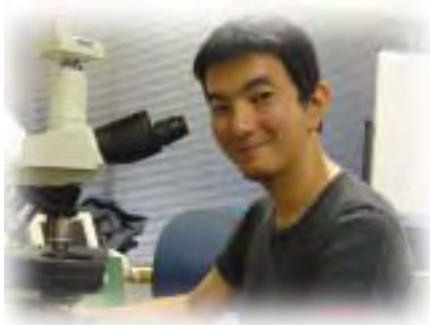
(滋賀県立琵琶湖博物館 上席総括学芸員)

### \*\*\*\*\* もくじ \*\*\*\*\*

表題	担当	頁	表題	担当	頁
* 安心まで売って欲しくない	前畑政善	1	* ツバメ悲しき結末	水相修躬	10
* 学芸員紹介	前田雅子	2:4	* ツバメ調査雑感	平井政一	11
* アサギマダラ・マーキングに参加して	森廣之	5	* ツバメ調査結果	井野勝行	12
* アサギマダラ・マーキング会下見で	比良ジャクナゲ	6	* 外来生物法とペットの嘆き	比良ジャクナゲ	13
* アサギマダラを追いかけて	草津家猫	7	* 庭の空蝉	加固啓英	14
* 比良に舞う蝶を追う	津田國史	8:9	* WANTED(ホトウキグサ)	芳賀裕樹	15
* アサギマダラと遊ぶ	草津ヤマボウシ	10	* 編集後記	スタッフ	16

大塚泰介さん (陸上生態系学)

前田雅子



1967年、富山県生まれ。182cmの長身で爽やかな大塚泰介学芸員を紹介します。滋賀県のケイ藻分布を調査されるなど、大塚さんといえばケイ藻研究のイメージがあります。初めにケイ藻についてお尋ねしました。また、この機会に教えてもらおうと、簡単なクイズを出していただきました。皆さんも一緒にどうぞ。

ケイ藻は顕微鏡でないと見えませんか？

1個の大きさは大きなもので0.1mm、小さなものは0.01mmくらいで、基本的に人間の目には見えません。顕微鏡でも1000倍で見るのが一般的です。そのため単独で暮しているときは分からないけれども、たくさん集まると色がついて見えたり、モヤモヤとした形になって見えるようになります。例えば、水がゆっくり流れる川で、春先に石の表面に茶色いモヤモヤが着いて水にたなびいていることがあります。これはケイ藻の塊。目には見えないが、実は身の回りのどこにでもいる生き物です。

— 教えて！ ケイ藻クイズ —

Q1 ケイ藻は陸地にもいる？

答えは 水の中は当然どこにでもいますが、畑や冬場の田んぼの土にもちゃんと生きています。種類は少ないけれども、乾燥に強い種が何種類かいて、土の上でもちょっと湿っていればいます。光合成をするので光がないと生きられませんが、光と水があればどこにでもいると思っていいくらいです。

Q2 ケイ藻は大変古い生き物の一つである？

答えは× 歴史は2億年弱で、哺乳類の出現とほぼ同じか、それより少し後といわれます。億の単位ですから古いですけど、地質年代順では新しい生き物といえます。しかも今普通に見られる「羽状目」というケイ藻は、たかだか数千万年の歴史しかないにもかかわらず、このグループだけで1万種以上います。形がものすごく多様であるのに歴史が短いということは、それだけ短期間に進化した、つまり進化の途上にあるということです。

Q3 ケイ藻は暑いのと寒いのとどちらが好き？

どちらかというとな寒い方が好きです。南極にある湖の氷の下にも暮していますし、極寒の環境下でケイ藻は生き物の主役といえるほど数が増えます。一方、熱帯や温泉にもいますが40~50度を境に非常に数が減って、ラン藻などが増えてきます。もちろん種類によって好きな温度は様々ですが、寒いところでより多く出る生き物です。

## ケイ藻に興味を持たれたのは？

大学3回生のとき、近くの川でダム建設計画が持ち上がり、その反対運動をしました。めでたく計画は中止になりましたが、その川の生き物を調べておこうと思いました。もう一つには、大学3回生までは研究室に配属されず、4回生になる時にどこかを選べということで藻類研究室に入り、初めはアオコの研究をしていました。けれどもバイトをしていたので遠出をしたり、他の人と時間を調整して出かけるような活動はできませんでした。アオコの調査は一人で出来るものではなかったので、自分のペースで出来るものがないという訳で近くの川でケイ藻を見てみようと思いました。

## 今、どんな研究を？

今年に入ってから「田んぼにフナを入れると何が起きるか」を調べています。安土町の田んぼで、1枚の田んぼを6つに区切ってその3つにフナを入れて観察しました。

結果は、フナがいる区画ではミジンコが食べられてほぼ壊滅状態、フナがいない区画では中干しの時期までミジンコがいることがわかりました。ミジンコほどではありませんがユスリカ、イトミミズ、カイミジンコもフナに食べられて少なくなりました。また、ミジンコが少なくなったためにそのエサである植物プランクトンやべん毛虫が田んぼに増え、更にべん毛虫に食べられるバクテリアが...というように、フナが入ると田んぼの生態系はガラッと変わってしまいます。特にニゴロブナは一匹のメスが数万個の卵を産むので、稚魚が1㎡に10匹以上いるということも珍しくなく、かなりミジンコに対するインパクトが大きいです。



## 大変お忙しいようですが、自由な時間には何を？

趣味は釣りですが、年々自由な時間が少なくなって、釣りも最近は本当に行かなくなりました。烏丸半島の前あたりにエビ(テナガエビ)がいるらしいので、余裕が出来たら晩帰り際にエビ釣りでもしようかと思っています。この辺りの人はあまりされませんが、関東人は“釣る”という非常に酔狂なことをするんですよ。釣れるのは大体梅雨時期に限られます。子どもの頃神奈川県茅ヶ崎にいたときは、近くの相模川でよく釣っていました。

それから本もよく読みます。暇になると漫画を読むか、活字の本を読むか...。文学は全く読まず、新書中心ですね。他の分野の専門書で、大学生向けの入門書のようなものも。

## 自転車でもどこへでも行かれると聞きましたが...

近頃体力が落ちているのであまり遠くには行きませんが、滋賀県に来てからは、例えば愛知川の支流の神崎川あたりまで釣りに行ったりとか。さすがにへ口へ口になりました。

車に乗らないので比較はできませんが、自転車の場合は目に留まるものがあつたら

止まって見に行くことが容易です。川で鳥が飛んでいたとか、魚の影が見えたとか、そういう時にすぐ様子を見に行けます。川を渡るときも、小さな川だったら橋がなくてもサイクリング車を肩に担いでそのまま越えられますし...

「もしも 1 ヶ月ぐらいの休暇があったら何をされますか？」の問いには、「最初の 3 日くらい寝て暮すのではないのでしょうか。」と言いつつ、「ただ、もう少し余裕があれば新しい技術を習得するとか、そういうことに費やしたい。」と研究熱心さがにじむお答えでした。

## レポーターの皆さんにメッセージをお願いします

良いデータを取られていますので、それからどういうことがいえるか、それを基にして次はどういうことを調べたらいいのかを常に考えていただきたいですね。来ていただければ相談にのれます。

最後に痛いところをつかれてしまいました。でも、観察の記録を生かすのは、素人の我々にはなかなか難しいことです。調査方法や数字に強いと評判の大塚さんだけでなく、博物館の「質問コーナー」には各専門の学芸員さん(館長さんも)が交替で終日座っておられます。力を貸していただきましょう。

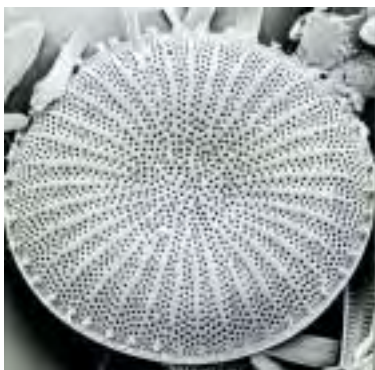
田んぼの研究が一段落してホッとされているところにお邪魔して、お話を聞かせていただきました。大塚さん、どうもありがとうございました。

本文に載せなかった なるほど おもしろ話

### ケイ藻の“裏の役割”と“表の役割”

どこにでもいて、昆虫やミジンコなど小さな生き物の餌になっているケイ藻は、生態系の底辺を支える生き物の一つ。しかも水中で光合成(炭酸ガスを取り込み、光のエネルギーで有機物を作り出すこと)をする生き物の中では、ケイ藻の生産力が一番高いといわれ、水中での生産の中心的担い手であるといってもいい。ただそれを片っ端からケンミジンコなどが食べ、またイワシなども食べるのでそこにいる量(現存量)は少なくなるが、ケイ藻は藻場や陸地の森林に負けにくいほどの生産力がある。これがケイ藻の“裏の役割”。

次に、私たちが実感できる“表の役割”が『珪藻土』の利用。ケイ藻はケイ酸質の殻で覆われているが、この殻を電子顕微鏡で見ると極々小さな孔がいっぱい空いている、或いは孔の集まったところに窪みができている。この孔は空気や水を通すし、水より少し大きな分子ぐらいは通すが、大きな分子はあまり通さない。そのため珪藻土を壁などに使うと、ススや化学物質などの悪いものを吸着してくれるので重宝される訳です。(スズケイソウ電子顕微鏡写真)



## アサギマダラ・マーキング会に参加して

FRS 森 擴之



ヨツバヒヨドリの花で吸汁する  
アサギマダラ

伊丹市昆虫館の主催する、びわこ湖バレイにおけるアサギマダラ・マーキング調査会の事前調査(7月28日)並びに8月4日の本調査ともに参加させていただきました。

本調査の8月4日は、台風の接近が心配されましたが、幸いのことに近畿地方は避けてくれましたので、参加者全員充実した一日を過ごすことが出来ました。

まさに“ヒラヒラ”と優雅に飛ぶこのちょうが、どうして何千 Km もの遠距離を渡るのか不思議に思われます。この飛び方は極めて省エネ的であるが故に、うまく気流に乗って長距離移動が出来る所かもしれません。アゲハチョウ特にアオスジアゲハなどとは大違いで、補虫するのも比較的容易です。

マーキングしたアサギマダラが秋になり、びわ湖バレイを離れ台湾など南の温暖な地方に無事旅することを願いつつ、放蝶しました。(彼らには、パスポートもビザも必要ないですよ)

以上



フィールドレポーターの参加者



BV アサギマダラの会 藤野さんによる事前説明



伊丹市昆虫館友の会の皆さんと参加者全員集合



## アサギマダラの観察・マーキング会 下見に参加して

7月28日、天候は上々、ゴンドラ乗り場で伊丹市昆虫館の方々との待ち合わせであったがJRの事故で到着遅れるとの事、びわ湖バレイ・アサギマダラの会の方が案内で山頂で待つ事となった。

さすが1100mの山頂、ここちよい風に吹かれながらびわ湖の展望を満喫しました。私にとってアサギマダラを認識するのは初めての事、ましてやびわ湖バレイで繁殖するのも初耳。

(アサギマダラの会の方がすでに早朝よりアサギマダラのいそうないくつかの谷をチェックを済ませ、我々に徒労を踏ませない配慮をいただいたこと、感謝に堪えません。)

全員集合ですぐに蝶の乱舞するヨツバヒヨドリの花咲くところに案内され、マーキング方法の指導を受ける。

蝶とは鱗粉におおわれた翅で、さわれば手に鱗粉がつくものと思い込んでいたのですが、アサギマダラは鱗粉が付かないばかりか、マーカーで翅に字が書ける。

「だからこそマーキングが可能だ！」 といえはそれまでですが。

雌雄の見分け方、メスの未婚、既婚の見分け方、標識記録表の記入方法の指導を受け早々に捕獲活動。

フジバカマに似たヨツバヒヨドリの花が集合して咲いているところに蜜を求めて飛来するらしい。捕まえた蝶はなぜか翅の下に印があるオスが多い。

メスはオスの翅の印を認識するのか？なんて考えながら手当たりしだい(そんなに捕まえられるものではないが)マーキングする。

成績はトータル9頭のマーキングのうちメスは1頭で既婚済。

あとで調べると、メスはオスの翅のマークを認識するのではなく、オスは腹端から白い毛の束(ヘアーペンシル)を出して広げる。このヘアーペンシルから性フェロモンを出し、それをメスに浴びせるらしい。

いずれにせよ、オスにとってメスを巡る戦いは厳しいようだ。

我々がマーキングした蝶はいつびわ湖バレーを飛び立ちどこへ行くか？

びわ湖バレーの **BV** と、びわ湖博物館の **LBM** のマークがはいったアサギマダラは何所の誰が見つけてくれるか！

過去の事例では台湾に到着し、確認されたのは11月後半らしい。

こんな小さな蝶が2000Kmも旅をするなんて自然と生命が生みだした神秘のロマンとしかいいようがありません。

**LBM**マークがクリスマスプレゼントになることを楽しみに待ちたいものです。

## アサギマダラを追いかけて

草津 家猫

連日の猛暑と高湿度が続く8月の初旬、伊丹市昆虫館友の会のイベントに参加させていただき、老若男女50人で蝶を追いかけてマーキングしてきました。

アサギマダラは春から夏にかけてびわ湖バレイで繁殖し、涼しい高原で夏を過ごします。これらの蝶の子供たちが、秋から冬にかけて再び暖かい南（沖縄や台湾）へ移動し、そこで卵を産みます。

びわ湖バレイは平地より10度ほど涼しく、極端な暑さには弱いアサギマダラにとっては快適な棲家だそうです。藤野さんからマーキングの仕方を知った後で、スキー上級者コースを下り、食草のヨツバヒヨドリの草むらを掻き分け、見つけましたが、うまく網に採りこめず、一度採り逃がした蝶が、ふわふわと優雅に舞い上がる姿をなんども見送りました。5センチほどの可憐な蝶に2000キロもの距離を移動する力が秘められているとは驚きです。



卵はイケマ、オオカマズルなどの葉に産み付けるようで、孵化するとマスカットのような綺麗なサナギになると説明されましたが、あとで本当にマスカットのようなグリーン色のサナギを見せられその美しさに驚きました。

マーキングをした直後の蝶がなぜか横たわったまま、ぐったりした様子で飛び立た



ないので、死んだのかなと思って藤野さんに聞いた方がおられました。

藤野さんが笑いながらその蝶のそばでポンと手を打たれると、蝶はゆっくり舞い上がっていきました。

これは刺激を受けることで活性化する性質がアサギマダラにはあるからなのだそうです。

記念撮影を伊丹のかたに撮っていただき、マーキングの集計を知らされました、FRが10、伊丹が32で計52頭のマーキングでした。

## 比良に舞う蝶を追う

F R S 津田國史

比良山系の打見山・蓬萊山で毎年行われている伊丹市昆虫館主催のアサギマダラ・マーキングの会に、今年初めて私たち LBM・FR も参加することになり下見と合わせて2度参加しました。



7月28日(土) Gondola・リフト無料券の配慮をありがたく受け頂上駅に着くと、アサギマダラ観察・飼育ケージがあり彼らの食草・吸蜜などの情報が得られ、展示コーナーでは蝶に関係の資料で事前学習ができるようになっていて、蝶など比良山系に生息の昆虫に寄せる企業の思いを知らされた。

アサギマダラ・マーキングについての説明、捕蝶の指導を藤野さんから受け、一行11名は、稜線をなでる風に肌寒さを感じながら捕虫網に今日の願いを込め、アサギマダラとの出会いにときめく思いを周りの草叢に向けていた。

Gondola駅直下の東斜面を下る途中からアサギマダラの吸蜜するヨツバヒヨドリの叢が現れ始めたところで、藤野さんから「この辺りから見られますよ...」と案内があり、緊張しながら斜面の下のヨツバヒヨドリを注意していたら吸蜜しているのを見つけた。「いた!」最初に見つけた喜びで思わず声をあげた。皆さんの注目を集めながら網を繰り出しひと振り、敵はひらりと体をかわして飛び立ち、あわてて二振り、三振り追いかけたが、手のとどかぬ彼方へ逃げてしまった。

もっと網を出さないといけなかったのに、蝶と網との間隔を読みきれてなかった、藤野さんから「慌てずに十分に網を出してから...」「アサギマダラは吸蜜中は直ぐには飛び立ちませんから...」と教えられた。

このあと東斜面下の叢では多くのアサギマダラをみんなで捕獲してマーキング・放蝶できた。昼食をこの台地で摂ったが、冬のこの斜面台地で、比良にはまだ登山用のリフトもなかった頃、壊れかけた小屋を見つけて一夜の宿にした独りの吹雪の夜を思い出し、アサギマダラの舞う盛夏の今とを重ねていた。



谷筋のスキーコースの斜面際に繁茂する食草を辿りながらリフト乗り場まで降り、別の斜面を少し登ったところで今日の予定を終了、リフトを使って山頂駅に戻り結果を報告、私は4頭のマーキングだった。思ったより多くのアサギマダラに出会い、次回の本番に期待して暑い下界の人となった一日だった。

8月4日(日)FR10名・伊丹市昆虫館 20 数名が山頂駅で藤野さんから説明を受け大山さんの先導で7月28日とは逆コースを辿る。

前日まで日本海を北上した台風の影響か蒸し暑く、少し動いただけで汗ばむのは仕方ないとしても、アサギマダラの姿も先日ほどには見られない。「なぜか台風



の後はこちらなんです」と伊丹の奥山さんからアサギマダラの解説があり、長距離を飛ぶアサギマダラが身につけた蝶の習性を垣間見た思いがして、今日は仕方ないかと納得できた。それでも皆さん意欲的に採集・マーキングされ、私が林間で追い、やっと採集した羽根には伊丹の方がすでに今日の日付を記入されていたのでそっと放してやった。

藤野さんから と の見分けかたの説明を受け、 は後肢羽根に黒い斑点がありには無く、交尾した には下腹部の節に付いている黒い線の上に、もう一本細い線が入りますと教えられたが、アサギマダラの社会では 対 の比はどうなんだろう？マーキングした固体はどれもみな で、 の交尾痕は確認できなかった。

マーキングしたアサギマダラが遠く台湾にまで飛んだのを確認できたらとの想いを「琵琶湖博物館と伊丹市昆虫館のマーキングしたどちらのが早く着くか楽しみにしましょう」との奥山学芸員の挨拶で笑いの裡に散会となり、ゴンドラに揺られて山を降りた。

## びわ湖バレーにアサギマダラと遊んで

【投稿日 '07.8.25】

草津 ヤマボウシ

8月4日(日)伊丹市昆虫館の友の会皆さんの行事に参加しました。朝、山頂には霧がかかっている、少し心配しましたが、ケーブルで頂上まで登ると霧は深くなくホットしました。山頂で飼育されているアサギマダラでまず確認したあと、マーキングの説明を聞きました。初めてのマーキングの体験です。

スキー場のゲレンデに降りていきながらチョウを探します。赤トンボ(アキアカネと聞きました)が一面に飛んでいます。網を振るとトンボが簡単に捕れます。これで網の使い方の練習は出来ました。でもアサギマダラに逢えません。何とか



1頭捕まえるチャンスにめぐり合えました。もう、童心に帰って遊びました。途中で大きなトンボの羽化したばかりの写真を撮りました。下手な虫取りで、肝心のアサギマダラの出会いは少なく残念でしたが、空気のきれいな山頂で植物観察や多くの虫の出会いはできて楽しい1日でした。

(ここから、ツバメの調査表に記入していただきましたコメントを編集させていただきました。)

## つばめの悲しき結末

水相修躬

今年も燕が我が家の玄関に巣作りを始めた。過去に一度生まれた雛を蛇に吞まれた苦い経験があるので蛇に対しては万全の対策をとっていた。おかげで無事に6羽の雛が生まれた。親鳥はかいがいしく餌を運び大切に育てていた。もうすぐ巣立つという5月31日仕事から帰ったら巣が壊され雛が1羽もないではないか。やったのはカラスかムクドリか。親鳥はあきらめきれず、悲しそうに鳴いてその場を離れない。

それから5日後、信じられない光景を目にした。1羽のカラスを2羽の燕がピツピツと鳴いて追いかけているではないか。これで犯人はカラスだとわかった自分の何十倍もあるカラスに立ちむかってどうにもならないのに。あきらめきれなかったのだろう。

「子どもを返せ、子どもを返せ」そう叫んでいるようで、見ている方も悲しくなった。

## ツバメ調査雑感

高島市 平井政一

子供の頃の思い出になるが、今から40年前は、家人が常時いて、玄関戸も昼間はいつも開いていて、典型的な農村の家だった。

今と比べると、当時は世間全体ものんびりしていた時代だったと思う。

その頃は、我が家にもツバメがやってきて、玄関土間の天井に巣作りをしていたし、近所にもツバメの巣がある家は多かったように記憶している。

巣を作られると、糞の始末や玄関のガラス戸の上の隅の1枚を外して、出入りできるようにしたり、世話も大変だった。また、ヘビがツバメのヒナを狙って、進入してくるので、何度か退治したこともある。

今のように、家族が留守がち、アルミサッシの頑丈な玄関になると、家の中への受け入れが困難になり、ツバメも巣の場所探しが大変だろうと思う。

5月中旬の休日の朝7時30分くらいに、つがいのツバメが我が家にやってきて、開けはなっていた玄関の中にはさすがに入らなかったが、玄関横の軒先や離れの1階の軒先に留まって、新居を物色していた。ずっと観察していると、都合15分くらいいたが、残念ながらお気に召さなかったようで、飛び去っていった。

我が集落内を、見回ったり、人に尋ねたりして、ツバメの巣を探したが、どうやら報告した1軒のみしか確認できなかった。純農村集落でありながら、農家にツバメの巣がほとんど見あたらないのは、時代の流れと思うが、やはり寂しいことに違いない。

## ツバメ調査の結果

2007年5月13日

甲賀市 井野 勝行

甲賀町には以前から3種類のツバメが毎年渡ってきて、育雛しています。  
今回の調査でも3種類とも巣ともども確認できましたが、渡ってくる時期が3つともちがうので  
最も早いイワツバメ(今年は2月7日初見!!)はもう、雛が巣立ちかけ、ツバメは雛が小さく、最も遅いコシアカツバメはまだ雛の気配が巣にありませんでした。  
また、ここ数年、イワツバメの勢力拡大の傾向があり、同じような場所に営巣するコシアカツバメが追われている感じがします。

3種類の中では、個人的にはイワツバメがまるっこくてかわいいので好きなのですが、ツバメの青い背中や、コシアカツバメの優雅な飛び方も捨てがたいですね。

第二回目は時期をしばらくおいて、また違う場所で3種を確認したいと思っています。



コシアカツバメ - 1



イワツバメ - 1



コシアカツバメ - 2



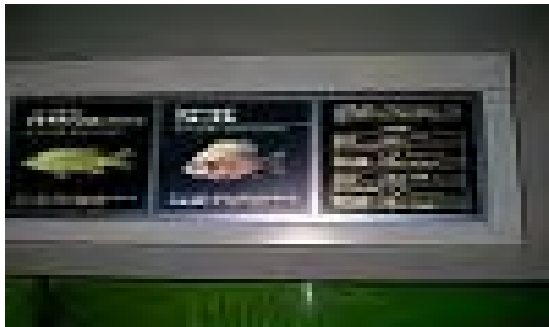
イワツバメ - 2

## 外来生物法とペットの嘆き！

我家では現在年齢15歳のミックス犬のペットを飼っています。犬の15歳は高齢で、人間と同じく目や耳が悪くなっているようです。また小便も我慢できずにチョコチョコつながれた場所でやっています。これって生きものの自然の摂理ですね、我々もいずれ同じ症状が現れるのでしょうか。一度飼いかければ一生面倒をみるのがペットを飼うものの責任。家族の一員と、世話をしています。しかし大きくなりすぎた、人気が無くなった、子供が面倒をみなくなったなどいろんな理由で捨てられるペットのなんと多い事でしょうか。観賞植物もまた同じで不要分を河川に放流するなどから大きな社会問題となっています。

そこでペットなどとして飼われている外来動植物で 人に対し危険を及ぼす 生態系をかく乱する 農村の被害を誘発するなど、当てはまるものを「特定外来生物」と指定し、その動植物の輸入、飼育、繁殖、譲渡を禁じる法律ができました。この指定された「特定外来生物」のなかで、私たちの住む滋賀県で見つかったり、定着しているものも数多くいます。

【博物館では特定生物法により飼育が制限される事から、環境省、農水省より許可を得て展示を行っています】



例えば

お馴染みのオオクチバス、ブルーギルやアライグマ、ウシガエルなど。また最近確認できたものでカミツキガメ、ヌートリア、セアカゴケグモなどです。植物でもボタンウキクサ（ウォーターレタス）、アレチウリ、オオフサモなど定着しています。これらは当初、ペット、食料、観賞植物として持込まれたものが不要となったが、「生きているものを殺すのはかわいそうだ、とその

後先を考えず放した」結果でしょう。

悪いのは人間です。「特定外来生物」は好き好んで外国である日本に来たわけではないのです。（古くから定着しているアメリカザリガニ、縁日のミドリガメ、浮草のホテイアオイなども外来種ですが除去困難で「特定外来種」からもれている種があります。）

冒頭「ペットは飼い主が責任を持って飼わなければいけない」と申しましたが、皆さんの家でもイヌやネコを飼っておられ、それらを自分の家族の一員として育てておられる家は沢山あります。イヌ、ネコはペットとして死ぬまで面倒を見る方が多いのですが、一方動物園でしか見られないような動物、爬虫類など珍しい生きものを好んでペットとして購入する方もおられ、それらを「飼育できなくなったから」や、「食料にしなくなった」と野に放った事から今日の問題が起きている訳で、法律を必要とさせたのは私たち自身なのです。

外来生物法に該当するペット等で今飼っているものは、そのまま飼い続けることができます。

しかし法律で届けが必要で。

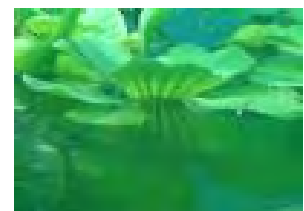
博物館では相談コーナーに「指定外来種飼養等届出書」が置いてあります。気軽に相談、ご利用ください。

決して放置したり、譲渡しないで下さい。最後まできちんと飼うことが、飼い主の責任です。

\* 博物館に何種類の特定外来種が飼育展示されているでしょう？

観覧された時、確認してくださいネ！

【ウォーターレタスを見かけた方はフィールドレポーターへお知らせください】





## 表 題 [庭の空蝉(ウツゼミ)]

投稿日 [2007・08・10]

名前[彦根市・加固啓英(おけらのオッチャン)]

\* 子供たちとの接点がいくつかが有り、日頃気になっているのですが、ごく普通の日本語の単語を知らず、ひどい省略語や片仮名英語でしか話せなくなりつつあることです。そこで、変な日本人・日本語作りに抵抗して、今後の投稿は「老いの一徹」で「ケイタイ」は「携帯電話(ケイタイ電話)」と小学三年生なら読解出来る程度に、日本語とルビと意味を添えさせていただきます。

現在、体調が充分でなく、毎朝の相棒犬「トラ」の約一時間の散歩以外は、あまり出歩かず、庭の池や睡蓮(スイレン)鉢のメダカ・ロコ・ハゼ類・タナゴ類、の管理や、庭の中の温帯ジャングルを見るだけで一日を過ごしています。

庭で多数の空蝉(ウツゼミ・セミの抜け殻)を見つけました。昨日までの合計は47個、数日前に家内が大掛かりに枝打ちをし、その後から回収を始めた数です。今朝7時ごろに7個を回収しました。中に一個、羽化に失敗して干物(ヒモノ)状態の無念の形相(ムネンのギョウソウ・表情)で殻から半分出ているアブラゼミのものがありません。

昨夜は長い鎖につながれた相棒犬「トラ」が濡れ縁と庭とを駆け上がったたり駆け下りたりしての大興奮、何かと思えば、次から次へと飛び来るセミを捕食し続けていたのです。抜け殻の留まっている高さは2m以上から地表すれすれまでさまざまです。コンクリートの上を水平に移動し、家の壁にとりついたものは、概ね(オオムね)40cm止まり。これは、殻が固くなりだす時間によるのでしょうか。

直立した幹には高さが2mを超えるものも見られます。ひこ生えや細い枝に紛れ込んだものは、ドン詰まり付近で、重さで葉が垂れ下がった位置では、方向転換して、必ず頭を上に行っている様です。

庭中に親指大の穴が見られますが、多分これが幼虫が這い出した位置でしょう。産卵と、孵化(フカ)、幼虫の地上、地下への移動も見たいと思いますが、これについてご存知の方が居られましたら観察法等を教えてください。

本日、相棒犬「トラ」と、その「心のボス」である私は愛知川河川敷での散歩、その後彦根市立図書館でセミの抜け殻の見分け方の説明のある本をさがして来ます。

## WANTED 「ボタンウキクサ」

琵琶湖博物館学芸員 芳賀裕樹

フィールドレポーターのニュースレターには久しぶり（5年ぶり？）に登場の芳賀です。前はヘチマがテーマでしたが、今回はボタンウキクサ調査の提案をします。

ボタンウキクサという和名よりも、通称であるウォーターレタスの方がご存知の方が多いかもしれません。ほんの1年前までその辺のお店で売られていた観賞用の浮標（ふひょう）植物です。ところが一転して、2006年2月、この植物は「危険な生物」として指定され、販売はおろか、趣味で栽培したり人にあげること、持ち歩いたりすることも禁止になりました。オオクチバスやブルーギル、カミツキガメといっしょに『特定外来生物』に指定されたのです。

私が初めてボタンウキクサを見たのは4年位前、博物館の布谷さんのところに持ち込まれたのを見せてもらったように記憶しています。どんな水草かインターネットで調べて、サトイモ科の植物であること、繁殖力が旺盛で、佐賀県ではクリーク（水路）を覆ってしまい、その除去にン千万円かかったため、HPに「見かけたら連絡してください」と掲示されていること、などがわかりました。その後、淀川のワンドが覆われて大変、とか、堅田内湖もやられたらしい、という情報が入るようになりました。

私が知っているボタンウキクサの分布は、赤野井湾の奥や、草津市の志那の湖岸などです。また大阪自然史博物館にいた藤井さん（現 人間環境大学）によれば堅田内湖やいくつかの内湖にも分布するようです。ただ、ほかの分布はよくわかりません。琵琶湖本体はまさかボタンウキクサで埋まることはないと思いますが、1ヶ月で300倍に増えるという話もあり、内湖や水路、ため池などは危ないかもしれません。

なにせ1年半前まで普通に売られていたのですから、県内のどこにも出現してもおかしくなく、未然に被害を防ぐためにも分布を把握しておくことが必要かな、と考えています。

というわけで、ボタンウキクサの分布を調べ、ついでに特定外来生物法も勉強しようというのが今回の提案です。



赤野井湾のハス群落周辺にて。2006年12月5日

## フィールド・レポーター 9月・10月・11月予定

次のとおり計画しておりますので皆さんご予約、ご参加お願いいたします。

なお、稀に予定が変更になる場合がありますのでご了承ください。

日 時	内 容	場 所
9月15日(土)13:30~17:00	定例会	博物館交流室
10月06日(土)13:30~17:00	定例会	博物館交流室
10月20日(日)13:30~17:00	定例会	博物館交流室
11月03日(土)13:30~17:00	定例会	博物館交流室
11月17日(土)10:30~17:00	定例会(掲示板発行予定)	博物館交流室

(おことわり；上表の博物館とは琵琶湖博物館のことでです。)

### 《編集担当からお詫びと訂正》

前号(第46号)に間違いがございました、皆様には大変ご迷惑おかけいたしました。お詫びして下記のとおり訂正させていただきます。

- 1, 2 ページ目；榊田学芸員 榊永学芸員
- 2, 4 ページ目；投稿者のお名前違い、上段が伊東貴美子さんの原稿、下段が中川徳司さんの原稿でした。

### 《フィールド・レポーター・スタッフから編集を終えて》

今年の梅雨明け以降の暑さは厳しいものでした。地球温暖化が進行していると肌で感じられたような気がしました。8月4日のびわ湖バレーの伊丹市昆虫館の友の会とのアサギマダラ・マーキング交流会は、地上の暑さもしばし忘れ童心に返って網を振り回し、楽しい一日でした。9月2日には「チッチゼミの観察会」も企画しています。また、次の調査は「ウォーターレタス」も提案されています。ぜひ多くの方にフィールドに出て、参加されたご感想などご投稿お待ちしております。

(担当 FRS 椋島昭紘)



# 掲示板



2007年度 第4号(11月) 通巻第48号

## 椋島さん深謝

椋島さん(編集長)ありがとうございました。

長らく掲示板等の編集をやっていただいた椋島さんが、この度、お仕事の関係で外国へ行かれることになり、編集長を退任されることになりました。思い起こせば、私の遅筆のため、度々ご迷惑をお掛けしましたが、この間、何の苦情もおっしゃることなく、にこにこ対応いただき、何につけてもその穏やかな人柄がFR会議を円滑に進める原動力になっていたのではないかと感じております。韓国に行かれても、ますますお元気でお過ごしになられること、スタッフ一同お祈りいたします。なお、許されますならば、韓国へ行かれてからも、自然や暮らしについての随想などお送りいただければ幸いです。最後に、もう一度、深謝。

## 山中さん(新編集長)、よろしくお願ひします

椋島さんの後任として、山中佐紀子さんが新しく編集長に就任されました。山中さんは、自己紹介(編集後記)にもありますように、ナマズにたいへんご興味をもっておられ、大学院修士課程では水田で産卵するナマズの生態を調査する中、琵琶湖博物館にもたびたび来られていた方です。今回、椋島さんの後任を探していた折、お名前があがったので、早速連絡させてもらったところ、大変快く編集の仕事をお引き受けいただきました。いろいろご厄介おかけすることになるかと思いますが(ご迷惑お掛けせぬべく努めますが、)、どうぞよろしくお願ひいたします。(FR担当:前畑政善学芸員)

### \*\*\*\*\* もくじ \*\*\*\*\*

#### 掲示板目次(48号)

表題	担当	頁	表題	担当	頁
* 椋島さん深謝	前畑政義	1	* 草津パワフルに参加して	高田政一	8
* チッチゼミ観察会	比良シャクナゲ	2	* チッチゼミの新ポイント発見	山犬の主人	9
* チッチゼミ観察会	山犬の主人	3	* 流出するボタンウキクサを見た	津田國史	10・11
* 近江富士・三上山のセミ	津田國史	4・5	* 「パワフル交流・市民の日」	前田雅子	12
* ボタンウキクサ調査中間報告	芳賀祐樹	6・7	* 編集後記	スタッフ	13

平成 19 年 10 月 15 日

## 比良のシャクナゲ

### チッチゼミ 観察会

私はこの年になるまでチッチゼミの鳴声や、生きている姿にお目にかかったことが無い。幼い頃から、セミといえばニイニイゼミ、アブラゼミ、ヒグラシ、ツクツクボウシ、ミンミンゼミであった。

それに最近クマゼミが加わった。これは地球温暖化のせいで、太平洋側などの暖かい地方のクマゼミが北上してきた事から、滋賀県でも町の公園で朝早くから暑さを倍増さず鳴声で通勤の足を重たくしている。

今回「チッチゼミの観察会」ということで、大いに期待して参加した。

三上山への登りが始まると、すぐに「これがチッチゼミの鳴声」と教えられた。

チッ・チッ・チッと連続した虫の音のようにも聞こえた鳴声は頭上の特定できない場所から聞こえる。耳を傾け鳴声の先に目を凝らすも中々チッチゼミを探し出せない。

博物館の周りでなくツクツクボウシだと直ぐに見つけることが出来るが、針葉樹(ヒノキ)の高いところで鳴くこの小さなチッチゼミを探すのは並大抵でない。



一円硬貨(直径 2cm)で大きさを確認

尾根道へ出たところで一休みしていると、近くで「いた・いた」の声、さっそく皆が集まる。

見ると羽化したてのチッチゼミがまだぬれた薄い羽を風になびかせ必死に木の幹にしがみついていた。

\*\*\* 写真左一円硬貨の横 \*\*\*  
~なんて小さなセミだろう~

その後、全員であちこち調査した結果、チッチゼミ合計 4 匹、抜殻多数を採取できた。

チッチゼミ 4 匹はいずれも羽化してまもないようで、木の幹の下部や葉の裏で見つかった。

こんなに小さなセミが、こずえの上で鳴いたのでは「声はすれども姿は見えぬ」で採取するのは至難の業だろう。

案内していただいた寺田さんもビックリの成果となった。

(その後、文化ゾーン・近代美術館の横の森を探索したところ、例のチッチッチとチッチゼミの鳴声が確認できたが姿発見に至らず。チッチゼミの鳴声がかげれば、意外と身近に生息しているかも分からないと思った幸いです。)

今年は猛暑だったせいかチッチゼミの発生が遅かったようだ。言い出しっぺである手前、事前調査をしたのは8月23日出勤前の犬の散歩がてら朝の6時に三上山登山口へバイクで。犬は後ろのカゴの段ボールに乗せて。登り始めてすぐの分岐で犬がそれ以上登ろうとしない。実はお盆に帰省しており、山に登ったが下山時に熱中症で犬が疲れ、5合目から担いで下りたのだ。そのトラウマのせいか。分岐に犬を繋ぎ自分だけで調査ポイントへ。抜け殻を探すに15分かかってやっと3個。これでは少々無理かと思い、前畑さんとのメールのやり取りの結果、1週間の延期となった訳である。8月26日(日)は菩提寺山にチッチゼミの発生調査に行った。旧第2びわこ学園跡から入山したものの、登山道が荒れており、みどりの村ルートとの出合まで到達できなかった。だが途中でチッチゼミの鳴き声を確認した。実はこの日の目的は『ミン・チ・セットの仮説』が法則化できないか調べるためであった。つまり『ミンミンゼミがいるか?』である。ニイニイ、アブラ、ツクツクはよく鳴いているが、ミンミンの鳴き声は聞こえなかった。次回は前述のみどりの村ルートで調べたい。

彦根市薩摩町のポイントでは8月27日にチッチゼミの初鳴きを確認、日ごとに強くなる。これで三上山は大丈夫だ。9月2日(日)早朝少々天気が悪かったが、徐々に上空に青空が広がって来た。降水確率は午前30%午後20%。これならいけると判断。実施を決断した。

御上神社駐車場の地図案内板でポイントを説明し出発、登山口へ。猪よけのゲートから入ったとたん、賑やかなツクツクボウシの蝉時雨の中にチッチゼミの鳴き声が聞こえる。これには驚いた。私が3年前にこの三上山でチッチゼミの調査を始めてから、中腹の調査ポイントより下で鳴き声を聞いたことはなかったからだ。おそらく昨年地元の人が大規模な下草刈りをされた結果と思われる。これで登りながら皆さんに鳴き声を覚えてもらうことができた。調査ポイントまでは15~20分のタイムが3倍の45分をかけたの『乍ら登山』。ポイントに着いてすぐに抜け殻発見の音が上がり、間を置かず羽化の現場に遭遇。何と昼の3時前なのに…。まるで観察会を祝してのお出迎えのようだ。一般の登山客を巻き込んでの大騒ぎ。しばしの羽化観察の後、白い森の妖精はFRSの虫かごへ。そして井門さんがシャシヤンボの木で成虫を見つけた。しかも2匹も。相次いでヒノキに止まっている姿も。次々と目標が達成され大成功の観察会であった。一人ではできない貴重な経験をさせてもらった。

9月9日(日)朝9時半、わが家の玄関の庭の杉の木でチッチゼミの鳴き声をした。最初は耳を疑ったが、間違いはない。しかしいくら眼を凝らしても姿を見ることはできなかった。観察会のお礼に来たのだろうか、それともお礼参りに来たのか…。午後には比江の長澤神社に行ってみた。チッチゼミの鳴き声はするが、数は少ないようだ。抜け殻も全く見つからない。ミンミンゼミの声は全く聞こえない。このポイントはニイニイ、アブラ、ツクツク、チッチの4種か? このままでは仮説の法則化は難しいかもしれない。来年また頑張ろう。

チッチゼミの観察が出来る格好の場があると、FR 仲間の寺田さんの案内で、前畑さんを含めFRS10名は9月2日午後、近江富士・三上山に登った。

小学校の遠足以来の三上山だ、「山頂までは行かない、男山と女山のコルが観察の好地点」との説明になんとかほっとしたのは私だけではなかった。御上神社の駐車場から見上げる山稜のそのたわみは80mくらいだったから。



寺田さんから観察地点の説明をうける

登山口の垣の扉を開けて登るようになってるのは猪対策とやら。先を行く寺田さんが立ち止まり「ほら...あそこ」と指差してくれるが、高い木の幹にとまっているチッチゼミはわれわれ初心者には見付けられない。

「鳴いているよ」とのことでみんな一斉に耳をすますが聞き取れない。双眼鏡を取り出し、いわれた方向に向けたが、樹木の皮の色、瘤などが視野に入るだけでそれらしい形態は捉えられない。まして鳴き声などさっぱりだった。

チッチゼミが出現していることは確かなようで、それを楽しみに僅かばかりの山道を喘ぎ登りコルに着いた。ホットひと息、腰を...と思ったその時、「居タッ！」と声があがり近くの数名が一斉にしゃがみ込んで一点に眼を凝らせている。

「羽化してるのや...」と興奮を抑えた声は森さんだった。淡黄色と云うよりクリーム色といったほうが近い固体が、まだ羽が抜けた状態で殻の下辺の樹皮にしっかり脚爪を立てている姿に、みんな一斉にカメラ向ける。

と、椋島さんが1円貨幣をそばに貼り付けてくれた、これでチッチゼミの大きさがよく判る写真になった。実に小さい！まことにちっちゃいセミだ。

さっき双眼鏡で探しても視野に入らなんだのは無理もない、こんな小さいのは樹木の斑点、枝の落ち跡ぐらいにしか見えないだろう。

羽化が進んで羽が伸びた状態となったが、色はまだ変化が少ない。しばらくそのままにしておくことになりそばを離れる。

膝の高さでの羽化は他のセミとあまり変わらないが、午後のこの時間に羽化した個体を間近、それも手の届くところで観察ができたわれわれは幸運だった。

ツキはまだ続いていた。すぐ近くで井門さんが「オッ居ルッ！」と胸の前の叢の枝に手を伸ばしていた、成虫だ。さっきの羽化地点一帯いたるところの低位置でチッチゼミの抜け殻を見つけたので、抜け殻集めは飽和状態だったが、成虫が見つかったとあればがぜん色めき、みなさん今日のツキにあやかろうと意気が揚がった。



羽化が終わったところ、羽の色はまだ薄い

鳴き声がすると寺田さんは教えてくれるが、私に聞こえてくるのは遥か下の道を走る車の音、ほかの虫の声などで、チッチゼミの声は聞き取れない。

みなさんの耳には聞こえているのに私にはどう精神統一しても聞こえないのだ！

姿はさっき井門さんが掴まえた個体で観察できたから満足できるが、声を聞きたいのに果たせ

ないのだ。アブラゼミ・ツクツクボウシなど聞き慣れたゼミの声とは違う鳴き方で、鳴き始めればずうっと持続して鳴くというこのチッチゼミの声が聞き取れないとは。なんとかこの耳で聞いてみたいと意識を集中させてみたが、三上山のチッチゼミの美声？は終に私の耳に達することなく、聴覚の劣化を確認できたただけであった。

ゼミといえばせいぜいアブラゼミ、ツクツクボウシ、ミンミンゼミぐらいしか捕えたことがなく、これまで名前すら知らなかったチッチゼミを新しく確認できたのは嬉しいことであった。しかも羽化している個体が見られ、手で捕えた成虫まで観察できたのは、まさにツイテいた観察会だった。

それにしてもチッチゼミの声を聞き取れなくては、今後、何処かで鳴き声がしていても全く知らずに過ごしてしまうことになるのは悲しいことだ。彼に対して申し訳ないと云わねばならない。山の中まで行かなくても近くの神社の境内に生息していると聞いているが、声を頼りに探すことが出来なければとても探し当てることはできないだろう。となると、私はよほどのツキが無い限りチッチゼミとの出会いは悲観的だ。

今回の三上山のチッチゼミはその意味ではじつに貴重な出会いであったと云わねばならない。



しっかり爪を立てた抜け殻



# ボタンウキクサ調査 中間報告

芳賀 裕樹

10 月初頭より開始したボタンウキクサ（ウォーターレタス）の調査では、これまで 20 数名の方から情報が寄せられました。報告の多くはボタンウキクサが確認されなかったというもので、心配していたよりも分布範囲は広くなさそうで、少し安堵しています。

皆さんからこれまでに寄せられた報告と、私や前畑が行った調査結果を元に、現在までにわかったボタンウキクサの分布状況を概略を整理してみたいと思います。

## 1. 北湖湖岸周辺では、今のところボタンウキクサは見つかっていない

彦根から琵琶湖大橋までの湖岸の分布しそうなところ（河口や水路の出口、港周辺など）、真野～和邇周辺の湖岸、彦根周辺の湖岸、長浜港、長命寺港、沖島でボタンウキクサが分布しないことが確認されました。それ以外の湖岸は十分に調査できていませんが、私が車で琵琶湖を一周しながら見える範囲で探した限りでは、ボタンウキクサらしい群落はありませんでした。以上の結果から、どうやら北湖の湖岸沿いにはボタンウキクサは分布していないようです。いただいた報告の中に長浜でボタンウキクサらしい群落を見かけたというのがありました。場所が特定できないのですが、少し気になります。実は数年前に黒壁スクエア周辺で 1 株見たという情報があり、長浜市の特に川は要注意なのではないかと思っています。

## 2. 赤野井湾近辺の内湖以外は、ボタンウキクサは分布しないようだ

レポーターの方々の調査により、西の湖、伊庭内湖、曾根沼、野田沼（彦根）、乙女が池、近江舞子内湖、堅田内湖、平湖、柳平湖、木浜内湖にはボタンウキクサが分布しないことが確認されました。私が調査した旧入江内湖（承水路）、早崎内湖、野田沼（尾上）、貫川内湖、浜分沼、松原内湖、エカイ沼、五反田沼にも分布は認められませんでした。これらの湖のうち、西の湖、エカイ沼、乙女が池、堅田内湖は、かつてボタンウキクサが出現したことがあります。今回の調査結果は、かつての出現地点でボタンウキクサが定着しなかった（おそらく越冬できなかった）ことを示すと思われる。内湖ではありませんが、湖北の三島池も無事だという報告をいただいています。

赤野井湾の奥の小津袋・えりの浜では広い範囲でボタンウキクサの群落ができていました。また赤野井湾の隣の津田江も、株数は少ないですがボタンウキクサの分布が報告されました。

## 3. ボタンウキクサの分布は南湖の赤野井湾が中心

南湖の西岸全域と、東岸の唐橋から草津川河口までの東岸南部、木浜埋立地の東岸北部はボタンウキクサがないことが、レポーターの方からの報告と私たちの調査で明らかになりました。どうやらボタンウキクサの分布は赤野井湾と、その南の草津市志

那の湖岸に限られるようです。赤野井湾の大群落は、すでに新聞などで報じられていますので、ご存知の方も多いでしょう。特に湾奥の法竜川の河口付近の群落が大きく、湖岸から沖に向かって数十~数百メートルの黄緑色の帯ができています。

#### 4 . 守山市の池から赤野井湾にボタンウキクサが流れている

守山市の鳩の森公園の宮川池にボタンウキクサがある報告をレポーターの方からいただきました。現地に行ってみると、池のボタンウキクサが横の水路に流れ出しています。この水路に手を入れてみると、とても暖かい。どうやら某工場から出る温排水のようです。水路を下っていくと、やがて法竜川に合流し、赤野井湾に流れていきます。その途中に点々とボタンウキクサがあるのが確認されました。どうやら、赤野井湾のボタンウキクサの、少なくとも一部は宮川池から流れてくるようです。

ボタンウキクサは熱帯~亜熱帯の植物で、日本では越冬できず、野生化することはないだろうといわれていました。前述のように、かつて出現記録のある4つの内湖で今回はボタンウキクサが分布しないことが確認されていますから、滋賀県でも越冬して定着するのは難しいようです。ところが、赤野井湾ではタンウキクサが、私が知る限りでも3年間連続して出現しています。その原因のひとつとして、守山市の宮川池が越冬地になっている可能性が考えられます。まだ実際に確認したわけではありませんが、宮川池の水源は井戸水なので、冬でも温度が比較的高く、そのためにボタンウキクサが越冬できる可能性があります。宮川池でボタンウキクサが越冬しているかどうかは、今後調べなければならぬ課題です。

赤野井湾のボタンウキクサが宮川池から供給されているだけで、湾内に越冬できる個体がいなければ、宮川池の群落を取り除くだけで問題は解決します。しかし、もしかしたらすでに越冬できる個体が赤野井湾に出現しているかもしれません。そうなると問題はやっかいで、除去には何年もかかるかもしれません。

#### 5 . 湧き水や井戸水が水源の池に注目！

ボタンウキクサの分布調査の期間はまだ1ヶ月以上あります。琵琶湖の湖岸のボタンウキクサの分布は大体わかってきましたが、北湖のどこかには、ひっそり隠れているかもしれません。また、宮川池の例でわかったのは、住宅街に近い池も要注意ということです。もしまだ調査をされていない方で、どこに行けばよいかわからなかった方は、ぜひ近所の池に注目してください。観賞用に販売されていたボタンウキクサを、特定外来生物とは知らずにまだ家で栽培していて、何の気なしに近所の池に放してしまうかもしれません。実際、ボタンウキクサが特定外来生物だということはよく知られていないようで、新聞によれば赤野井湾で増えたボタンウキクサを見に来たついでにお土産に持ち帰る人もいます。近所の池、特に湧き水や井戸水などの、冬でも暖かい水が水源の池は、ボタンウキクサの越冬地になるかも知れないので要注目です。調べに行ってもしボタンウキクサがなかったら「ない」という報告もぜひお寄せください。分布範囲を特定するのになくってはならない情報ですし、後で出現したときに、出現時期を特定するときにも役立つからです。

## 草津パワフルに参加して

守山市 高田 正一

日 時：11月10日 9:00～15:00

於：草津市役所2階

\* 賑わいは:

4回目の参加である。天候は良好、大勢の客が来て、フィールドレポーター活動の宣伝には最適と期待して、展示とワークショップを準備して客を待った。

しかし、

昼過ぎになっても客は皆無に近い。来たとしてもパワフルに参加している身内ばかりである。なぜだ！

なんと当日は天津で‘全国海祭り’があり、天皇陛下が来県された事もあり、草津周辺の殆どのボランティア系各種団体が活動している人達が海祭りの方に駆出されたようである。結局、客は十数名だったと思う。

‘オナモミダーツ’は子供に、‘魚の折り紙’のコーナーは健康体操グループのご婦人に人気があった。

\* 出展内容は;

現在調査中の‘ボタンウキクサ’と“はしかけ”の活動内容である。展示内容は非常に素晴らしいと自信を持っていたが、殆どの方が素通りであった。

返信用の封筒まで持って帰った人は1人だけだったと思う。質問なども無かった。

他のブースも少しは覗いて見たが、我ブースでもこの状態～他は押して知るべし～である。

\* 参加人数は:

“はしかけ”は誰も来ていなかった。フィールドレポートは7名、学芸員3名であった。

それでも展示準備は非常に手早く15分程で終了、撤収はブース解体を含めても30分はかかっていない。流石、手慣れたもの！

\* 反省:

1. 今回のイベントへの参加は失敗であったと感じている。“自分達が楽しければ”それだけで良いのだろうか？
2. 毎年参加しているから今年もでは無く、今年は今年で割り切る勇気も必要では...
3. 準備期間の日数・周りの状況などを把握して、参加の是非を判断できる能力を身につける必要を感じた。

以上

表 題

## 【チッチゼミの新ポイント発見】

投稿日 [071106]

メッシュコード 5236 - 4072

名 前 【野洲市 山犬の主人】

湖周道路でチッチゼミの新ポイントを見つけた。10月2日 15:40、車で走行中に近江八幡運動公園でチッチゼミの初鳴きを確認。10月6日 15:38 再び確認。実はこのポイントでは往路すなわち北進するときには聞こえるのに、復路では聞こえないのが不思議だった。彦根市薩摩町のポイントは9月には結構賑やかに鳴いていたせい、往復とも聞こえていたが、この時期になってからは往路で聞こえず、復路で聞こえるのがもう一つの不思議だった。10月8日(祝)に運動公園に調査に行った。場所は限られた狭い範囲のみで複数いるようだが多くはないし、他には鳴き声は全くしていなかった。そして、いくら探しても姿を見ることも、抜け殻も見つけることはできなかった。実はこの日、前述の二つの不思議のわけが分かったのである。結論は、私の左右の耳に聴力の差があるということである。しかもチッチゼミの鳴き声の周波数あたりが、右の耳で聞こえるのに、左の耳では聞こえないのである。三上山での観察会ときには至る所で鳴いていたせい、気が付かなかったようだ。毎年の聴力検査では異常はないことからして、そうとしか考えられない。日常生活では何の異常も感じていないのだから…。年内にある健康診断でも異常がなければ確実にそういうことになる。だとすればチッチゼミの鳴き声は、人によっては聞こえないこともあるほどの境界線辺りの周波数なのだろうか。以前にも書いたがチッチゼミは通常平地には生息しないらしい。海拔 100 ㍎に達しない平地で鳴いていることは雌を呼んでいるのであり、その場所で子孫を残すことを意味する。つまり生息にほかならない。この運動公園のポイントには針葉樹はない。直径約 10 ㍎の中に数匹がいると思われる。自信過剰と思われるかも知れないが、車の窓を開けて走行中にチッチゼミの鳴き声を聞き取りその位置を特定できる人は、多くはいないと思う。チッチゼミにのめり込んで3年、日曜・祝日を除く毎日、決まった時刻に同じ場所を通るわたしは、去年までこのポイントではその声を聞いていない。このポイントは八幡山と一体と考えるべきなのだろうか。つまり八幡山から飛んで来たという…。しかしたった3年の浅い経験からではあるが、チッチゼミの生息地が拡大するのはそんなに速くないと思われる。先に述べた薩摩町のポイントは3年間広がってはいないのである。湖畔の松並木の中で、メタセコイアの近傍半径約 10 ㍎の中だけなのだ。荒神山から曾根沼を飛び越えて飛来した可能性が有力と考えたものの、チッチゼミの好む樹木の並木がなければ、到底無理と思われる。針葉樹やシャシャンボなどのツツジ系、ネジキなどの植栽を施したとき、生息地から樹木とともに運ばれたとしても、あまりにも飛躍があるように思う。山取り盆栽でもあるまいし…。謎は深まるばかりだ。

チッチゼミの飛び方は、メジャー6種が 10 ㍎位をひとつ飛びなのに対し、隣の木に飛び移る程度だ。メジャー6種の体の断面が偏平なのに、チッチゼミはほぼ円形である。この形状は飛行に不利な気がする。鳴き声もメジャー6種の『俺はここだ』に対し、『チッチッチ、チッチッチ、こちらでござる』という、スズメのお宿の呼び込みといったおとなしさである。マイナーである原因はこの辺りなのだろうか。

昨07年11月15日、ボタンウキクサの増殖過程の一端を検証できる不運??に巡りあった。

ボタンウキクサが繁茂するのは個体が流れついて始まるのではと考えられているが、その通りであると実証できる現場を見たのだ。

ボタンウキクサの調査報告で、守山市の鳩の森公園で見つけたとの報告が中井さんから寄せられていたので、本当?まさかそんな内陸の池で?半信半疑で、見間違いではとの思いが強く、この目で確かめようと昨日午後現場へ行った。

ひと目見て驚いた、まがうことなくボタンウキクサの群落が宮川池の岸辺で手を繋いで若草色を誇示しているのではないか。ここは市の管理下にある公園で、この池は昔からの湧水池で下流の水田の水源・江西湧(こうざいゆう)の名で清流を供給していたが野洲川改修などの影響で枯渇し、市がポンプアップして水源を確保したものだ。

この宮川池の横は絶えず通っているが、これまで鳩の森公園には入ったことがなかった。初めて入った池を巡りながら、ボタンウキクサが間もなく池を覆うようになるのでは?これ以上増えたら?この水は何処へ?と排水路を探した、なんと最初に私が立った足の下に径800位のヒューム管が設置されていた。

そしてその排水管の口にウキクサの塊が!これは問題だ、外に流れ出ているのではと排水管で繋がる江西川(こうざいがわ)を調べたら、20m下流、八田神社裏の左岸のコンクリート壁面から雑草が垂れ、水面に達したそれに藻が生育し、その藻に絡んでボタンウキクサの大~小10株位が流れに揺れているのではないか。

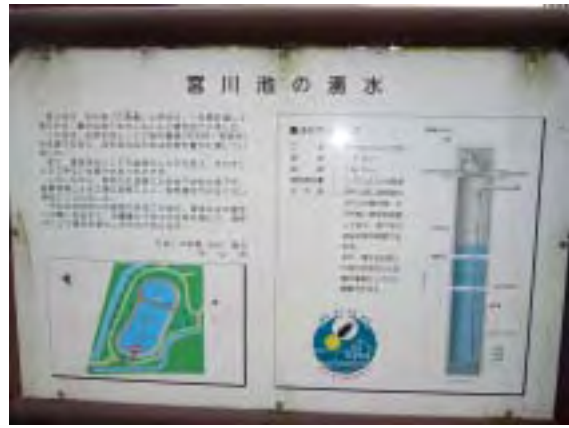
江西川の水源は(株)旭日化成の中にあり、昔は湧水池で湧水が豊富で、蛍の成育に適した水域を作っていた。いまも流れの水は綺麗で速く、魚類、カワニナが生息して蛍の生育地として、市の環境保全区域に指定されている。その川にボタンウキクサが流れ出しコンクリート壁面のバットレスの陰で流れに揺られているのだ。5m下流右岸にも上から垂れた葛のつるに絡まって2株のボタンウキクサを見つけ、これは疑うことなく宮川池からの流出だと判断した。

念のため先の排水管に戻って江西川に掛かる橋(ここで川はL字に折れてる)から江西川側の排水管内を覗いたら、薄暗い奥になにやらそれらしい物が!単眼鏡の焦点を合わせてみたが、逆光なので確実にボタンウキクサとは断言できないが、形状はボタンウキクサのそれに近い。排水管の池側の口に絡んでいたことから判断すればまず間違いのないと思う。L字カーブに架かる橋より上流の江西川を調べたが、こちらにはボタンウキクサは見られなかった。

市の管理下にある公園の池で、特定外来生物に指定のボタンウキクサが繁茂しているのを見たのはショックだった。それ以上にここから外に流れ出していることを検証した衝撃のほうが強く、なんとか流出だけは止めて貰いたく、その脚で市役所に行き担当者に仔細を伝え、対策をお願いして帰って来た一日だった。



宮川池の周辺図



市の説明版



池の奥に排水口が



排水口を真上から



江西川に開く排水口



左岸の雑草に絡むボタンウキクサ



右岸のクズの蔓に絡むボタンウキクサ

## パワフル交流・市民の日」で ボタンウキクサを

前田 雅子

11月10日に草津市役所で開催された「パワフル交流・市民の日」の集いに、今年も琵琶湖博物館のはしかけとフィールドレポーターが参加しました。草津市の文化・体育・福祉の市民団体が会して活動や成果を発表し、交流を図る催し物です。体操協会やバンド等のステージ発表、市民会議サミット、活動紹介のパネル展示や実演、フリーマーケット、模擬店など、多彩な内容でした。

フィールドレポーターでは現在行なっているボタンウキクサ調査のパネル展示を中心に、オナモミやセンダングサを的に当てて遊ぶ“オナモミダーツ”と、大きな紙で魚の形を折る“コイ・フナ帽子”作りで、来場者に楽しんでもらいました。スタッフの多胡さんが作ってくださったダーツは、子どもたちに大人気。博物館の特別企画展「コイとフナのきた道」の展示の中で使われているコイ・フナ帽子は、折り紙好きの人や、孫へのお土産にという女性に人気がありました。肝心のボタンウキクサ展示は、サッと見て通るだけ人がほとんどで、あまり知られていない植物を紹介するのは難しいと感じました。

けれども、この行事の実行委員で、フィールドレポーターでもある方から、驚く話を聞きました。詳しくは聞けなかったのですが、「大阪ではよく見る。道頓堀付近では川幅の半分くらいにあって…。滋賀でもずいぶん前に、高島町の白鬚神社沖で見た。」ということでした。

これまでにレポーターのみなさんから寄せられた調査票によると、ボタンウキクサが見られたのは守山市から草津市にかけての湖岸沿いと、守山市街地にある池のみです(右図)。霜が降りるころには枯れるそうですが、調査期間はあと1ヶ月ほどあります。ガマ調査で調べた池など、ちょっと覗いていただけませんか。「ない」報告も、是非ともお寄せください。



## フィールド・レポーター12月・1月・2月予定

次のとおり計画しておりますので皆さんご予約、ご参加お願いいたします。  
 なお、年末・年始につき予定が変更になる場合がありますのでご了承ください。

日 時	内 容	場 所
12月 1日(土) 13:30～17:00	定例会	博物館交流室
12月15日(土) 13:30～17:00	定例会	博物館交流室
1月12日(土) 13:30～17:00	定例会	博物館交流室
1月26日(土) 13:30～17:00	定例会	博物館交流室
2月 2日(土) 13:30～17:00	定例会	博物館交流室

(おこわり；上表の博物館とは琵琶湖博物館のことです。)

### 《フィールド・レポーター・スタッフから編集を終えて》

桜島さんから引き継ぎまして、今回編集をさせていただきました山中佐紀子です。琵琶湖博物館には長く通っておりますが、フィールドレポーターは初参加です。なので、多少の不便があると思いますが、温かい目で見つつも厳しいご意見をお願い致します。

私が琵琶湖博物館に足を運ぶようになったのは、ナマズがきっかけでした。当時、滋賀県のポスターにピワコオオナマズが使われており、一目見た小学生の私はとりこになりました。大きな口とぼんやりした顔がなんとも言えない愛嬌がありませんか?!それ以来、ずっとナマズに片想いです。家族に釣り好きがいる訳でもなく、農家でも漁師でもない私がナマズに出会えるのは、数年後に琵琶湖博物館が開館してからでした。長かった…。

「なんでナマズが好き？」と周囲に不思議な顔をされながらも、ナマズ好きをアピールし続けました。その甲斐あってか(?)、高校の授業で琵琶湖博物館に訪れ、ナマズの権威である前畑学芸員に出会いました。その後もナマズについて色々ご指導を受けて、今回はフィールドレポーター・スタッフのお誘いを受けました。ピワコオオナマズのポスターからここまでになるとは、夢にも思いませんでした。そんな思い出のポスター、どなたか持っておられたら是非お譲り下さい。

フィールドレポーターとして皆さんに身近な情報を発信し、編集担当として皆さんの情報を円滑に流せるように、頑張っていきたいと思っておりますのでよろしくお願い致します。

(担当 FRS山中佐紀子)





# 掲示板



2008年度 第1号(2月) 通巻第49号

## ヒトは魚のなれのはて？

魚は、背骨をもった生きもの（脊椎動物）のうちで、地球上で最も繁栄しているグループだ。現在、二万六千余种が知られてる。地球が誕生して四十六億年。そのずーとずーと後、今から約5億年前に初めて現れた脊椎動物が魚である。ヒトはその延長線上にある。もし、魚が出てこなかったら、ヒトという生きものも地上に出て来なかったのだ。私がしばしば言う“ヒトは魚のなれの果て”の由縁である。

魚の体を眺めてみると、眼、鼻、口・・・など、私たちヒトを含むグループ（哺乳類）が持つものを、魚はたいがい持っている。ヒト（哺乳類）にあって、魚にないものを探すのはけっこう大変だ。魚の多様さは、姿や形にとどまることなく、生活のありさま（生態）も実に多様だ。住処ではヒマラヤのような高山溪流から深海にすむもの、生殖様式では体内・体外受精はもちろん、卵をばら撒くものから守るもの、中には他の魚に托卵するものさえもある。その他、冬眠・夏眠するもの、空中を飛ぶもの、家族生活を営むものなど、解説すればキリがない。

魚が群れをつくるように、ヒトもしばしば群れをつくる。1尾あたり同じ量の餌を与えて、金魚を1尾で飼った場合と群れで飼った場合の成長量は違うだろう。みなさんお察しのように、群れで飼った場合の方が成長が著しい。これは、群れでいると安心して餌をとることができるからだろう。さて、人間の場合は如何？

（FR担当：前畑政善学芸員）

\*\*\*\*\* もくじ \*\*\*\*\*

## 掲示板目次(49号)

表題	担当	頁	表題	担当	頁
* ヒトは魚のなれのはて？	前畑政義	1	* オオミノガのその後	森 擴之	7
* ボタンウキクサ 調査探訪記	古谷義彦	2・3	* 虫はエライ！ うんこ染め体験報告	前田雅子	8・9
* 亀尾市金鳥山 (Kumosan) 道立自然 公園散歩	椋島昭紘	4・5	* 虫のうんち染めに 参加して	家猫	10
* もちつき	多胡好武	6	* おしらせ		11
			* 編集後記	スタッフ	12

表 題【ボタンウキクサ調査探訪記】

投稿日【080108】

名前 【草津市 古谷 善彦】

昨年のフィールドレポーター調査には1月2日の「ミノムシ調査」に始まり12月21日の「ボタンウキクサ分布調査」で終わりました。と言っても中抜きで調査への参加はこの2つだけになりました。

いずれも湖西北部の今津町中心ですが、いつもながら計画には程遠く思うほどの広範囲の調査が出来ないまま、今回も付随的な楽しみの方を優先させたような探訪記となりました。

秋の深まる頃から、何としても湖西北部でボタンウキクサの存在をこの目で確かめたい、との思いが有ったものの実行する機会が無いまま、とうとう年の瀬も、調査の期間も押し迫った12月21日に実行することにしました。

朝の天候は晴れ、北部の天候を案じながらも出掛けることに。

朝9時過ぎに出発、国道161号を北へ進むに従って車の数は少なくなって来るものの志賀町役場、消防署を過ぎたあたりから雨模様、来たからには行くしかない！！と決めながらも寄り道をしたこともあって「ボタンウキクサ」の調査は貫川内湖から始まり再び南下という無駄な行程に。

貫川内湖の北湖と南湖、その間に流れる境川、そして湖岸沿いに百瀬川、今津浜、浜分沼、石田川、今津川その後、風車街道を庄堺川から水鳥センター辺りまで、名も無い小さな川を含めて川面を覗き込んで見たものの幸か不幸か？すべての川でボタンウキクサを見る事は出来ませんでした(この場合は見られない方が良く決まっているのに)



貫川内湖

雨のせいで水が濁って水流も早かったのですが、そうでなくてもほぼ繁殖はしていないのではないかと一人合点しています。

昼食時になって目指すは先日、開店が新聞に掲載されていた箱館山スキー場に近い期間限定の箱館そば「嶋野」へ。午後1時半なのにテーブルにつけない人が5～6人待っているほどの人気？この辺りの道路事情は良くなっているものの飲食店などは今津運動公園の「ゆめの」くらい、ここは待つしかない。



石田川河口

山菜そばを食した後、折角だからと酒波のもみじ池を覗いて見ることに・・・こんなところにボタンウキクサがあるはずが無いとは思うものの絶対とは言い切れない思いがあります。何故なら数年前からこの池でブラックバスを度々目撃しており、暖かい日差しの日には水面を悠々と泳いでいるのがはっきりと見られるからです。

調査もさることながら思いつくまま、琵琶湖の眺望を眺めて見ようとそれからピラデストを目指すことにしました。

道路の至るところに落石があって、「落石注意」の標識も立てられておりこれはちょっと危険だな～と思いながらも引き返せばよいものを上がって行くと急に右前輪に違和感と異常音、下りて見るとウー！！パンクだ～！！鋭利な岩石を踏んだようで濡れたタイヤから湯気が出ている。

仕方なく取り替えようとスペアタイヤを出している所へ下ってきた好青年、「私の車と同じですから良く知っています、取り替えましょう」と10分程で取り替えてくださった。神様、仏様だ。(家に帰って家内に話すと今朝、家の中で小さな蜘蛛を発見したが朝の蜘蛛は良いと殺さなかったのが良かったのかもと言われて人間にも予知能力がある？それとも蜘蛛の知らせ？)

それにも懲りずホッ！としながらも今度はマキノ方面へ車を走らせたが、スペアタイヤは走り難くスピードを出すのが少々怖～い感じ。

メタセコイヤを見てマキノ高原へ、雪は全く無い、温泉「さきら」に入ると入浴客もまばらで閑散としていて、雪で潤う地域の経済効果は自然との共生そのものだと痛感しました。



マキノのメタセコイヤ

サプライズな出来事のあった一日でしたが、ボタンウキクサについて今は、湖西北部には分布していないと言えるのではないかと考えています。

しかし、ボタンウキクサは「観賞用浮標植物」から「危険な生物」へと短期間に繁殖力旺盛な『特定外来生物』に指定されたことを考えると、安易な判断は危険であり、フィールドレポーターの機を捉えた「ボタンウキクサ分布調査」は貴重な調査であります。今回の調査に終わらず、これからの環境問題の大きなひとつのテーマとして今後も機会があればこの地域に目を向けたいと思っています。

投稿日 2008.1.10

韓国 亀尾市 椋島昭紘

### 亀尾市金鳥山 (Kumosan) 道立自然公園散歩

こちらに駐在して三ヶ月になります、赴任当初はハングル文字のラッシュにやや疲れましたが、ようやく慣れつつあります。亀尾市は日本の北陸ぐらいの緯度でしょうか、気温は11月中旬の最高気温は約12度位、朝は2度位です。12月中旬過ぎて最高気温は5度前後、朝は氷点下3度前後が続きます。でも陽だまりは小春日和の時もあります。そして大きく違うのは空気が乾燥していることです。風が吹くと埃っぽくて、喉を痛める人が多いと聞きます。わが部屋にも加湿器が欠かせません。

紅葉の見ごろは11月中旬で終わりましたが、昼と朝方の気温の差が大きいのでとても美しく色づきます。この公園は観光地ですので造園された庭に、カエデの紅と褐色のケヤキ、イチヨウ黄色の配色とても美しいです。山は紅葉見物をしながら登山する人が多く、登山道は人をよけながら見物です。公園の指定された場所では、バーベキューを楽しんでいるグループがあちこち見られます。

山の中に入るのは慣れていないので、整備された道を歩くだけですが、11月初、谷川の土手にツリフネソウが咲いていましたので写真を撮りました。12月になって山では落ち葉を拾いながら、クリ、クヌギ、ミズナラ、カシワ、アベマキ、アオギリの緑色木肌そしてサルトリイバラやノイバラの赤い実が目立ちます。

ボタンウキクサの調査報告ですが、貯水池、川には水が少なく、見当たりません。やはり、12月末には氷点下になり、川や貯水池に薄氷が見られるので、無くて当然でしょうか。

11月終わりには貯水池にカルガモ、マガモ、集まってきました。雨がほとんど降りません、だから水は減ってきて、1月には鳥たちも薄氷の隙間で泳いでいました。毎週末に、池まで散歩しますが数も種類もあまり増えません。山は落葉樹が多く、樹も少ないので岩はだが目立ちます。公園の道沿いにはレンギョウ (kenari)、サクラ (pokko)、ツツジが植えてありますので春が楽しみです。そうそう、工場の陽だまりでカメムシを見かけました。珍しいそうです、今年は暖冬と社員が説明してくれました。



紅葉の金鳥山、貯水池



1月の金鳥山



ツリフネソウ



アオギリの実



カチ (国鳥)



貯水池の鳥



貯水池の鳥



## もちつき

FRS 多胡 好武

12月16日、今年も恒例の「びわ湖博物館もちつき」が生活実験工房で行われました。

久々の搗きたて餅、ダイコンおろしや、きなこ餅、しょうが醤油で美味しかったこと！

「もちつき」は永く親しまれてきた年の瀬の風物詩ですが、1970年代以降、食生活や住居様式の変化などから、都市では自宅でもちを搗く風景はほとんど見られなくなりました。

しかし今回の「博物館でのもちつき」のように保育園、幼稚園でのもちつき体験、商店街のイベントや、色んな記念行事のお祝い事には、いまなお「おもち」をついたり、配られたりしています。

おもちの由来

「モチ」は稲作農耕の食文化のひとつで、神祭などの祝いの日の食べ物として伝えられました。

古い日本では「モチヒ」と言い、モチは糯もち米（粘りの強いコメ）や籾もち（ヒエなど粘りをだしたもの）。「ヒ＝飯」は穀物を煮たり蒸かしたり食べ物のことで、その二つの単語を合わせた言葉とされ、この「モチヒ」を省略したものや、鏡餅のように満月の形（望月）からともいわれます。

このモチを神祭などの食品としたのは稲作信仰によるもので、モチを食べる事で神の霊力を体内に迎え、生命力の再生、補強を願ったといわれています。

また、一年の最も重要な神祭のお正月を年玉（年魂）といい、昔は家族やゆかりの人にモチを配る風習が各地にあります。

「ありあけも三十日にちかし餅の音」(芭蕉)

『おじいちゃん上手ネ！』

「餅つきや焚火のうつる嫁のかほ」(召波)

二句でも分かるように、餅つきは朝暗い内から始めたり、夕方から夜にかけて行われたりし、大きな農家などでは小作人も集めて朝まで続くことが多かったようです。小生の幼いとき、「うちは何臼搗いた」など話していたのが記憶にあります。

餅を搗く杵が現在のように横杵になるのは天和・元禄期で、それ以前はウサギの餅つきに似たタテ杵で女性が搗いていたようで、当時の屏風絵などに画かれています。また、「日葡辞書」(1603)には鏡餅、小豆餅、草餅、葛餅など16種類の餅の名があり、江戸時代急速に食文化が発達し、元禄時代(1693)には250種の餅の名が見られる様になったとのこと。

「餅は心地よき物、酒はうれしき物、茶は淋しき物」(風俗文選 1706) 当時の文化が偲ばれます。

今日の私の一句 「昼近し餅つく音に足がむき」・・・ご馳走さまでした。



# オオミノガのその後

2007-12-25

守山市 : 森 擴之



右の写真は昨年(2006年)の秋、守山市民運動公園南口脇のウバメガシワについているオオミノガです。

ここから採取した蓑5個を並べて写した写真が下の写真の上段です。これら5個の蓑のうち1個からは雄のミノガが羽化し、残り4個からはヤドリバエが羽化しました。



羽化したヤドリバエは上の写真です。

今年はどうなったでしょうか？



昨年同様、今年も同じ場所のウバメガシワにオオミノガの蓑がぶら下がっていましたので、無作為に5個採取し、保存しておいた昨年の蓑と比較しました。(上の写真)

昨年の蓑はおおむね5cm程度の長さがありましたが、今年の蓑は4cm以下と小型でした。

蓑を開いてみると5個中4個からはヤドリバエの羽化後の繭が確認されました。(左の写真)

さて、来年はどうなるでしょうか。

以上

# 虫はエライ！ うんこ染め体験報告

前田雅子

年明け間もない11月19日、伊丹市昆虫館副館長の後北峰之氏と、京都市在住の染色家倉谷禮子氏を講師にお迎えして、「虫のうんこ染め体験」を行ないました。参加者はフィールドレポーター、はしかけ、そして一般の人を合わせて27名。染色は初めてという人から玄人はだしの人まで、虫のうんこ染めに興味津々で集まった方々でした。

後北氏がうんこ染めを始められたのは、一つには「毛虫で緋を染めた」という言い伝えに触発されたこと、もう一つには昆虫館で日々集めてゴミ箱行きとなる糞があったからとおっしゃいます。伊丹市昆虫館ならではのユニークな研究ですね。

みんなの疑問である“なぜ虫のうんこで染まるの？”については、スライドショーで説明してくださいました。幼虫は葉を食べて必要な栄養を取り入れるが、色素成分などは利用されずに残り、糞として排出される。つまり糞に残る色素成分によって染まるわけで、基本的には草木染と同じであり、決まった食草を持つ(単一の葉しか食べない)虫だからきれいに染まるということでした。

## 染液を抽出する *気になるニオイ*

昆虫館が用意してくださった染材料のうんちはカイコ、ヤママユ、ツダナナフシ、アマミナナフシの4種類。参加者はどれで染めるかを自由に選ぶのですが、染め見本を見るとどれも大変きれいで、皆さん選択に悩んでおられました。

さて、いよいようんちの煮出しです。染材料ごとにグループをつくり、作業を始めました。染める布と同重量のうんちを、20倍の水で煮て濾し取る作業を3回繰り返し、3番煎液までとりました。この作業ではどんな色が出るかが注目ポイントですが、気になるのはやはりニオイ！ 湯気が上がる頃になると、「それほど臭くない」「お茶の匂いみたい」と声が飛びかい、「ちょっと臭いを嗅がせて…」と他のグループの作業台を訪ねる人も多く見られました。全般的には“お茶”の匂いでしたが、ヤママユは緑茶、ツダナナフシとアマミナナフシは烏龍茶、カイコは虫臭さのあるお茶と、多少違いがあったようです。食草はカイコがクワ、ヤママユがシラカシ(ブナ科であればOKだが、昆虫館ではシラカシを食べさせた)、ツダナナフシがアダン、アマミナナフシがサンゴジュですから、お茶あるいは葉っぱの匂いになるのは当然かもしれません。後北氏によれば、クスを食草とするアオスジアゲハでは、爽やかなショウノウの匂いがするそうです。

どのグループもニコニコ、和やかに抽出作業が進みました。とれた染液の色はカイコが茶褐色、ヤママユとツダナナフシが緑色、アマミナナフシが赤褐色でした。



水で煮てこし取る



## 染色と媒染 *微妙な色の違い*

午後からは染めの作業に入りました。染液に被染物の布を入れて加熱し、90 に保って10 分間染めます。その後、色を定着させるために15 分間媒染液に浸し、さらに染液で10 分間染めて2 度染めました。布材は絹と綿の2 種類、媒染液もミョウバンと木酢酸鉄の2 種類があって、4 種類(2 布×2 媒染)の染めを計時しながら手順よく進めるのはややこしかったようです。それでもどのグループもスムーズに進み、最後に水洗いをして終了しました。

染め上がりは同じ染液でも媒染液によってかなり違った色合いになり、ミョウバンは明るめの色、鉄はグレーがかった渋めの色でした。また、絹と綿の布材によっても色が違って、絹の方が明るく淡い色になるのは不思議でした。

倉谷氏が染材料と水の量、pH 調整などを丁寧に指導してくださったお陰で、思った以上に濃い色で、染めムラもなく、本当にきれいに染め上がりました。絞りを解いて作業完了。作品展示を兼ねて集合写真を撮りました。



### 3時のお茶は

一段落して倉谷氏がラオス土産のカイコ茶を飲ませてくださいました。これがなんと“カイコの糞茶”。しかもティーパックの市販品です。恐る恐る飲んでみると、あっさりした烏龍茶の味がしました。きれいな糸が採れて、うんちで染色が出来、お茶にもなるとは驚きです。お茶はちょっと遠慮したいけれど、この体験を通して“うんち”が身近になりました。

食草による香りや色の違いが楽しめてよかった。フン茶も飲めたし、世界が広がりました。

うんちは発酵しているので、生葉を使った染色とどう違うかに興味がありました。また、どんな臭いがするかと思いましたが、いやな臭いではありませんでした。楽しかったです。(立石文代さん)

色素による染め方と、動物のおなかを通した「うんち」で染めるのは、初体験でした。(中略)昆虫好きの人には、着衣の色を染めて、多数の人が買い求めて、自然にやさしい着色で、経済効果も出ると思います。昆虫ファンが増えるとうれしいです。

参加者の声(アンケートより)

今回は、琵琶湖博物館はしかけのメンバーがたくさん参加されていました。作業をしながらの話題は大いに盛り上がり、特に「近江おりもの探検隊」の人は染めや織りについていろいろと教えてくださいました。「皆さんは顔見知りなのですか？」と不思議そうに尋ねた人がありましたが、そうではなくて、皆さんが積極的に参加され交流されたと思います。会を盛り上げてくださってありがとうございました。最後に、染め布の下処理や道具類の用意など、会を開くにあたっての諸準備を整えてくださいました近江おりもの探検隊の立石文代さんに感謝し、お礼申し上げます。

## 虫のうんち染めに参加して

草津 家猫

伊丹市昆虫館のご協力ご指導をいただき、大変楽しい時間を過ごせました。

食草によってカイコは黄緑・ヤマユガは茶色・ツダナナフシは緑・アマミナナフシは赤に染まります。

フンの形や大きさも様々で、自然の不思議に感謝しつつ、色見本より各自好みを選び、染布の重さからフンと水の量を決めて鍋で染液を煮出すのですが、お茶づけや麦茶の香りがし、その様子はグツグツと魔女鍋のようでした。木綿のハンカチと絹のスカーフに大豆やビー玉を輪ゴムでくくって絞りを施しました。



世界に一つだけの  
作品ができました

フン茶もいただき  
運がついたかも？



フィールドレポ

## ーターの皆さんへのお願い

今年の4月29日(火・祝)から企画展示「ファーブルにまなぶ」が始まります。この展示会は日本とフランス合計6博物館の共同企画で、ファーブル昆虫記100年を契機にして、ファーブルの仕事が日本に紹介され、日本で昆虫学がどのように発展してきたのか、という事を中心に扱います。この展示会の開催に当たって、以下の事にご協力いただけませんか。

### 1 ご自分の自然観察や発見を展示しませんか

ファーブルの一番の業績は、昆虫記などの著書もちろんですが、私たちが学ぶべき事は、何事も疑問に思った事は曖昧にせず、自分が納得いくまで観察と実験を繰り返して、解決したその態度だろうと思います。そんなファーブルにあやかって、自分はこんな観察をした、こんな発見があった、という事を展示して欲しいと思います。フィールドレポーターの活動の中での成果でももちろんかまいません。

最近各地で見られる、小さなボックスを使った室内のフリーマーケットをご存知でしょうか。このようなボックス(例えば40センチ・幅・高さ・深さの箱)ひとつを自由に使って、こんな発見をした、こんな観察をした、というような展示をしていただきたいと思います。大人でも子どもでも、内容も自由に使っていただいてもかまいません。昆虫の観察でなくても、植物でも気象でもかまいません。コレクションを展示するのも結構です。

申し込みの数によって、ボックスの数を決め、多い場合には展示会の途中で入れ替えなども考えるかもしれません。いかがでしょうか。

ある程度の数がそろわないと、展示会の展示として成立しないという弱みがあります。スタートは4月29日です。やってみようとお考えの方は、早い目に博物館の布谷までご連絡、またご相談ください。

### 2 仮面ライダーグッズを持っている方はおられませんか

昆虫の展示にあわせて、昆虫がモデルになっている歴代仮面ライダーの関連グッズを展示したいと考えています。とりあえずは10種のお面を入手していますので、これにモデルになっている昆虫の拡大正面写真を合わせて展示する予定ですが、同時に関連したグッズを展示したいと考えています。こういう展示に協力していただける方がおられましたら、布谷まで連絡ください。

(左:フリーマーケットのボックス)

右:仮面ライダーカブトと1号のお面)



## フィールド・レポーター3月・4月予定

次のとおり計画しておりますので皆さんご予定、ご参加お願いいたします。  
 なお、予定が変更になる場合がありますのでご了承ください。

日 時	内 容	場 所
3月 8日(土) 13:30～17:00	定例会	博物館交流室
3月22日(土) 13:30～17:00	定例会	博物館交流室
4月 5日(土) 13:30～17:00	定例会	博物館交流室
4月19日(土) 10:00～17:00	掲示板発行・定例会	博物館交流室

(おことわり；上表の博物館とは琵琶湖博物館のことです。)

### 〈フィールド・レポーター・スタッフから編集を終えて〉

立春が過ぎましたが、一段と寒さが増してきました。春が待ち遠しいのは私だけではないはず…。

今年の寒さは特に厳しかったように感じます。私は「しもやけ」が出来てしまいました。病院に行ったら、今年は寒いので「しもやけ」になる人が例年よりも多いとのこと。子供の時に一度なった事があったのですが、大人になって、しかも暖房器具の発展した現代になるなんて驚きです。しもやけになる要因は、一日の気温差と皮膚表面の温度だそうです。寒さでついつい厚着してしまいがちですが、皮膚も生き物と同じで呼吸し生きているんだと実感しました。

年末年始にはもちつきや虫のうんこ染め体験があり、イベントの多い時期でした。生き物調査は引き続き行っておりますので、是非ご参加ください。

(担当 FRS山中佐紀子)

